元盲目少年が行くゼロ魔の世界（仮）

鈴鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
元盲目少年が行くゼロ魔の世界（仮）

【Ｎコード】
Ｎ６６７１Ｔ

【作者名】
鈴鹿

【あらすじ】
神様のミスで全盲で生まれ、さらにミスで死んだ少年が、またしてもミスでゼロの使い魔の世界に転生するお話。
なお、主人公は現代の知識こそあるものの、ゼロの使い魔の知識に関しては皆無です
（作者もあまり原作知識あるとは言えませんが……）

８／１４
タイトルを変更します。新規タイトル考え中

※注意：この話はチートや俺ＴＵＥＥＥＥ表現がある可能性があります。
また、原作を崩壊させる可能性もあります。
これらを嫌悪する方は、戻られた方が懸命です。

プロローグ（前書き）

偉大な先達に習い、ゼロの使い魔転生ものを書き始めました。
文章が拙いとは思いますが、読んでいただけたら幸いです。
感想や批判などいただければ舞い上がらんばかりに喜び、悩みながら文章を考えるでしょう。

プロローグ

「いや、十分驚いてますよ？　頭で否定したいくらいには」
「それは現実逃避だよ」
「判ってます。てか、めちゃフレンドリーですね」
「フレンドリーな神様は嫌いかな？」
「ぜんぜんオッケーです」
「あーよかった。我が神である！　とか、偉そうにするの苦手でさー」
「で、神様が何のご用で？」
「ちょっとねー。後始末に来たのよ」
「後始末？」
「私、結構おっちょこちょいでさー。君が生まれるときに視覚付け忘れちゃったんだ」
「もしかして、俺が生まれつき盲目なのって……」
「ごめんねー。それ私のミス。幸い生まれる前に上司が気付いてフォローしてくれたんだけどね。向こうでは目が見えなくても生活できたでしょ？」
「まあ、出来ましたけど」

1つの感覚をなくすと他の感覚器官が敏感になるとはよく言うが、俺の場合は聴覚が敏感になったらしい。
敏感になりすぎて、世界でも数人しか居ないという『絶対空間把握能力』を身に着けてしまった。
『絶対空間把握能力』っていうのは、簡単に言えば音の反射で自分の周りの空間を把握する能力である。
音であれば、自分声だろうが他人の足音だろうが何でもいける。
蝙蝠が使うエコーロケーションに近いかな。

「で、とっても言いにくいんだけど……」
「さては、また俺に関することで何かミスしました？」
「ザッツライト！」
「いや大正解！　みたいなノリで言われても困るんだけど……　で。なにやらかしたわけ？」
「そのー書類を間違えちゃって、君を事故死させちゃったんだよね」
「まじっすか！」

てか、人間の管理って書類なんだ。初めて知ったわ。

「ホントにゴメン。本来ならあと１０年くらい今のまま生きて事故→植物状態のコンボで寿命を終えるはずだったんだけど……」

神様は頭を下げた。
それってむしろ幸せじゃね？
植物状態のまま寿命迎えるとか想像しただけで嫌なんですけど！
でも、家族はその方が良かったのかな。どんな形にせよ、俺が生きていれば家族は喜んだかな？
けど、だだでさえ全盲だったのにその上植物状態とか状況は悪化する一方だし……
それならさっくり死んだ方が家族に迷惑かけなくて済むか。

「まあ、もう済んだことだし、それは置いといて、俺はこの後どうなんの？」
「本来なら輪廻の輪の中に戻して、転生するよ」
「そうなんだ。じゃ、もうお別れかな？」
「その前に、私の後始末があるんだよ。私のミスで迷惑かけちゃったからね。何か希望があるなら２つ叶えてあげる」
「希望って言われてもな……」
「何でもいいよ～。例えば、美人姉妹の兄に生まれたいとか、オリ

ンピック選手並の運動能力とか」
「うーん。急に言われてもな。あ、転生したら視覚はどうなるの」
「そっちはちゃんと五感覚満足だから安心して」
「なら、特にないんだけど……」
「それじゃあ、私の償いが出来ないよ～。そうだ。じゃあ生まれる時代を変えようか。戦国時代とかどう？　ついでに戦略の才能もつけて日本統一するとか！」
「いや、それやると歴史が変わっちゃうんじゃ……」
「大丈夫大丈夫。世界は無限に枝分かれしてるからね。君が『戦略の才能を持って戦国時代に生まれる』っていう世界が１つ出来るだけだよ」
あっさり言うけど、それってものすごいことだよね？
世界が１つできるって、その世界にどれだけの人が居るんだよ。

「それやると正規の輪廻転生の輪から外れない？」
「それも問題ないよ。世界がいくつあっても輪廻の輪は共通だから」
「と言われても、日本統一とか興味ないし」
「むー、無欲なのも考え物だよ。それじゃあ、記憶を持ったまま転生するっていうのはどう？」
「あ、それいいかも。目が見えないから、知識としてしか知らないものがたくさんあるんだよな。色とか」
「なら１つは決まりだね。もう１つはどうしよう？」
「もう記憶だけでいいんじゃない？」
「それはだめ！　神様は借りを作っちゃいけないの」
「むー、面倒な。他に欲しいもの……じゃあ、『絶対空間把握能力』」
「へ？　でもそれ、目が見えるならもういらないんじゃない？」「まあ、そうなんだろうけど、今までずっと一緒に歩んできた能力だからな。俺の半身みたいなものなんだよ。記憶があるならそれもないと違和感ありそうだし」

「なるほど、じゃあ記憶の継承と『絶対空間把握能力』の所持だね。OK！　じゃ、今から転生させるね」

パンっと手を合わせた音を聞いた後、足先から感覚がなくなっていく。

「もう、会うこともないだろうけど、またね。次に来るときはこんな風に話すこともなく事務的に転生手続きされるだけだから」
「そうなんだ……じゃあ、神様ちょっとこっち来て」
「なにかな？　消えるまであんまり時間ないよ？」

神様が近寄ってくる。
手の感覚は……うん、まだある。

「ひゃうっ！？」
「へえ、こんな顔してるんだ」
「な、何を！？」
「顔を視てるんだよ。絶対空間把握でも出来なくはないけど、触った方がわかりやすいから」

両手で神様の顔を触る。
結構可愛いな。

「まったく、神様の顔に触れる人間なんて珍しいな」
「これもちゃんと転生先に持っていくからね。生まれたら神様の似顔絵でも書いてみようかな」
「ちょっと？！　それは困るのだよ！」

驚いた神様の声が聞こえた。
あ、もう手の感覚ないや。残念。もっと触っていたかったんだけど

な……

「はは、冗談だよ」

「神をからかうとはいい度胸だ！　転生先を原始時代にしよう。うん。そうしよう」

「うわ！？　それは辞めて！　記憶持ってても使い道ないじゃん」

「はは、冗談だ。からかわれっ放しで行かれてたまるか。大丈夫、ちゃんと転生先は現代にしておくよ。君が生まれたときと同じ時間軸だから安心するといい」

「そう……か。それなら、競馬の当たりでも……覚えておけばよかった……かな」

ものすごく眠い。もう意識を保ていられない。

「じゃあね。神…様……」

神様に最後の別れを告げて、意識を手放した。

プロローグ（後書き）

このあと、もうちょっとだけプロローグが続きます。
話の中で主人公が神様の動きとか把握してますけど、あれは能力によるものです。目が見えているわけではありません。
もっとも、見えているのと同じくらいの情報を能力で得ていますが……

プロローグ　ａｆｔｅｒ（前書き）

彼が消えた後の神様のお話。
どじっ子って可愛いよね。
大抵のことは許せてしまうから不思議。

プロローグ　after

私の前に1枚の書類が落ちている。
さっきまでここに居た盲目の少年が足先から光の粒子となり、この書類を形作った。
この中には彼の一生が記されている。
その書類を拾い、今度は何もない空間から書類を1枚取り出す。
同じように少年のことが書いてあるが、こちらは情報量が少ない。
感覚の欠損や能力付加、死因など少年の生まれと死について書かれている。
これは神様が管理する書類であり、ここに死ぬ時期と死因が決まり次第記す。
その2枚の書類を重ね、手を合わせて叩いた。
2枚はドロドロに溶けて混ざり合い、1枚の書類になった。
それを拾い、何処からともなく取り出した羽ペンで少年の願いを書き込む。

感覚：正常
才能：『絶対空間把握能力』
備考：記憶の引き継ぎ

「これでよし。あとは、元の時代の転生部署に渡すだけだな」

羽ペンを捨て歩き始めた。
それにしても、神の顔に触るなど珍しいことをする少年だったな。
誰かに顔を触られるなど初めてのことで戸惑った。
少年は見えないからわからなかっただろうが、私の顔はあの時真っ赤だった。
と、そんなことを考えながら歩いていると

「きゃ？！」
「おっとすまない。大丈夫か？」
「大丈夫だ。こちらこそすまない」

書類を持った別の神とぶつかった。その拍子に書類が床に落ちてしまった。
書類を捜すと、私のから少し離れた場所に落ちていた。
あぶないあぶない。ここで無くしたら元も子もない。
ぶつかった神に謝り書類を拾って、転生部署に向かった。

ａｆｔｅｒ　ａｆｔｅｒ

やれやれ面倒だからといって、前が見えないほど書類を持つものじゃないな。
そのせいで、神とぶつかってしまった。幸い書類は散らばらなかったようだ。
と、１枚書類が落ちている。

「おっと、落としていたか」

拾って内容を見た。

感覚：正常
才能：『絶対空間把握能力』
備考：記憶の引き継ぎ

「ほう。記憶を引き継いで転生とは珍しい。って、こんな書類あっ

たっけ？」

見覚えがない書類だ。
もしかして、さっきぶつかった神のものだろうか？
でも、それなら見つかるまで探すはずだ。

「さっきの神は何も言わなかったし、きっと私のだな」

私は書類を抱えなおして、『ゼロの使い魔』の転生部署に向かった。

プロローグ　ａｆｔｅｒ（後書き）

はい。またしてもミスっております神様……
さて、次から本格的に『ゼロの使い魔』の世界に入ります。
神様の出番はここまで。書類を持った神様出番少ねぇ……
なお、最初の神様が幼女、書類持ちの神様は男です。
書類神の容姿はどうでもいいや

感想・批判お待ちしております。
いただけると執筆速度が上がったり下がったり。

第1話『うっかりミス発覚！』（0～2歳）（前書き）

なるべく気をつけているのですが、誤字脱字などがあれば報告していただけるとありがたいです。

第1話『うっかりミス発覚！』（0～2歳）

「ふむ、生まれたか」

男の声が聞こえて目を開けると、優しげな笑顔の女性が俺を抱いていた。

その隣で、口髭が凛々しい長髪のオッサンが、俺を見て微かに微笑んでいる。

「はい。旦那さま。元気な男の子です」

「出産に立ち会えなくてすまない。いつ生まれた？」

「1週間前です」

「1週間前……ジャックと同じ誕生日か」

「まあ、そうでしたか。おめでとうございます」

「……すまない。アガーテ、私はジャックを……」

「謝らないで下さい。妾になった時から覚悟しています」

んん？　いま妾とか言わなかったか？　このオッサン妾って、愛人だよな。つまり不倫？！　浮気で母さんに手を出したのか！

許すまじ、髭！

「あらあら、どうしたの。急に暴れて」

「元気いっぱいだな」

「ええ、本当に」

「そういえば名前はもう決めたのか？」

「いえ、旦那さまに付けていただこうかと」

「そうか。どんな名前がいいものか……　よし、マルクにしよう。今日からお前はマルク・ザミル・ド・ワルドだ」

なにその名前！？　日本人の名前じゃねえ！
妄発言に対しても、一言この髭（父親）に物申してやりたいが、生まれたばかりで舌が回らない。

「そろそろ行かねばならん。使用人たちに引越しの準備をさせる。アガーテはゆっくり休んでくれ」

髭（父親）は使用人を呼んで荷造りをするよう命じ、部屋を出て行った。
使用人たちが荷造りを終えると、馬車に乗って移動した。
おいおい、いまどき馬車とかどれだけ時代遅れなんだよ……
現代で馬車なんて滅多にお目にかかれない。
いや、前は見えなかったけどさ……
引越し先はかなり大きなお屋敷だった。
使用人たちは荷物を馬車から降ろしてもくもくと運んで行く。

「さあ、マルクちゃん。お兄様と奥様に挨拶し行きましょうね」

馬車に乗っている間に自己紹介された。
母さんはアガーテと言う名前らしい。
どう考えても日本じゃないよな。ここ。
あの神様も現代としか言ってなかったし、日本に生まれるって言うのは俺の勝手な思い込みだったな。
まあ、言葉はわかるしなんとかなるだろ。

「あら、あなたかアガーテ？」
「はい奥様」

母さんの目の前に赤ん坊を抱いた女性が現れた。

多分、この人が髭（父親）の正妻なんだろうな。
母さんとはまた違った美人だ。母さんは可愛い系、正妻さんは凛々しい系だな。

「そんなに畏まらなくてもいいわ、気軽にディアナと呼んでちょうだい」
「はい。ディアナ様」
「様もいらないわ」
「そんな！　平民如きが貴族の奥様を呼び捨てになどできません」

話を聞く限り、母さんが平民で、正妻さんが貴族なのか。
平民とか貴族ってヨーロッパの方の習慣だっけ。
でも、現代でそんな習慣あったっけ？
王族とかならあったはずだけど……

「私がいいと言っているのだから気にしなくてもいいわ。それに、妾とは言え、あなたも私達の家族です。家族に様つけで呼ばれたくはありません」
「畏まりました。では、ディアナさんと……」
「それでいいわ。それで、そっちの子供はアナタの子？」
「はい。マルクと申します」
「そう、生まれは？」
「その……1週間前の夜になります」
「ジャンと同じ誕生日なのね」

正妻の息子と同じ誕生日か……
けど、俺は妾の息子だし、立場は向こうの方が圧倒的に上だよな。
これは、これからの身の振り方考えないといけないな。
と考えていると、ディアナさんが近寄って声を掛けてきた。

「初めましてマルクくん。君がジャンを支えるか、ジャンが君を支えるか判らないけど末永くよろしくね」

優しい声だった。今のところ冷遇はされてないみたいだ。
よかった。俺のせいで母さんがイジメにあうのは我慢できない。

「さあ、部屋に案内するわ。小さい屋敷だけど好きに使ってちょうだい」

そう言ってディアナさんは屋敷の中に入っていった。
母さんも慌てて後を追う。
てか、この規模で小さいのか？　一体どういう基準してるんだ。
屋敷の基準に呆れつつ、母の腕の中で眠りについた。

◇◆◇◆◇◆

屋敷に移り住んでから2年の月日が流れた。
2年間はなるべく目立たないように出来る限り子供らしく過ごした。
というか、好奇心に任せて動き回った。
当然だろう？　前世では目が見えなかったんだ。目にするものすべてが真新しい。
知識として知っているものをこの目で見て、どれだけ感動するか。
おかげで、前世で知りたいと思っていたことは大半知ることが出来た。
そんなある日、中庭で不思議なものを目にした。
葉っぱでできた人形が髭と戦っている。
なにあれ？！　あんな生き物いるの？

「あれは、魔法って言うのうよ」

じーっと見ていると、通りかかった母さんが教えてくれた。
魔法！？　なんでそんなものが実在するんだ！？
ありえない。
魔法は空想上のもので、現実では使えないはずだ。

「まほう？」
「そう、魔法。貴族だけが使えるすごい力よ」

ここ本当に現代か？
時代遅れの馬車が走り、魔法が存在する。
どう考えても、現代じゃないよな。ここ。
一番に思いついたのはあの神様だった。
もしかして、また何かミスったんじゃね？
すぐに五感をを確認して、前世の記憶も『絶対空間把握能力』もある。
お願いの方はきちんと叶えてくれたみたいだ。

「ぼくもできる？」
「きっとできるわ」

現代に生まれてないことには驚いたけど、魔法が使える世界っていうのも面白そうだ。
貴族が使えるなら、髭の子供である俺も使えるかもしれない。

「ぼくもまほうつかうー」
「ふふ、それじゃあたくさんお勉強しないとね」
「べんきょー？」
「まずは、文字を覚えないとね」

「べんきょーするー」

そういえば文字知らないな。
言葉は同じだけど、文字は確実に俺の知ってるものとは違うよな。
前世じゃ点字しか使わなかったし。
点字も覚えるのに苦労したんだよな……
その苦労が再び。
はぁ、憂鬱だ。けど、魔法を使えるようになるためにも頑張ろう！

第1話『うっかりミス発覚！』（0～2歳）（後書き）

さて、2年経ってようやく異世界に転生したことを知ったマルクくん。
魔法と言う未知を目の前に勉強を始めます。

次回！
マルクの魔法の才能やいかに？

追記
ご指摘を受けて、本文を修正しました。
修正前の話は、没話集に自分の戒めとして晒してあります。
修正後の話と何処が違うのか見てみるのもいいかもしれません。

第2話『こっそり勉強、そして実践へ』（5歳）

「それでは、魔法の特訓を始めますよ。坊ちゃま方よろしいですか？」
「うむ」
「ああ」

さらに3年の月日が流れた。
母さんから文字を習った後、書庫で魔法の書物を読み漁った。

「ディアナ小母様」
「なにかしら？」
「ごほんがよみたいです」
「そういうことは、アナタの母か使用人に言いなさい」
「よんでもらうんじゃなくて、よみたいのです」
「自分で読むの？」
「はい」
「すごいわね。ジャンは外で遊んでまだ読めないのに……」
「どうすればいいですか？」
「わかりました。旦那様に言って書庫に入れてもらいましょう」
「はい！」
「その代わり、読んだらちゃんと片付けるのよ？」
「わかりました」

ディアナさん経由で父……髭に頼んで書庫の入室許可をもらった。
まあ、仮にもらえなくても忍び込むつもりだったけど。
『絶対空間把握能力』はかなり便利だ。
神様の言うとおり、目が見えるようになってからは必ずしも必要ではない。

けど、目に見えない所を探るには最適な能力だ。
曲がり角の向こうに人が何人居るかどうかなんて簡単にわかる。
その気になれば、夜中に屋敷を走り回っても見つからない自信がある。
まあ、余計な手間が省けた。

……なんてことはなく、夜中にこっそり書庫に忍び込んで居たりします。

「ふっふっふっ。チョロい。チョロ過ぎるぞ！　こんな警備で大丈夫か？　大丈夫じゃない。問題だ！　なんつってな」

軽く現代のネタを混ぜつつ、夜の読書に勤しむ。
昼間はなるべく簡単な絵本や初心者用の魔法書しか読まない。
もし小さい子供が技術書を読んでいるところを見られたら、天才を通り越して異常に思われるだろう。
夜なら定時の巡回以外気にしなくてもいいし、書庫は障害物も多いからそう簡単に見つからない。
初めのうちは、気配を察知されてしぶとく探されたから撤退したこともあったけど、何回やってるうちに気配の消し方も覚えた。
そのときに本を片付けるのが間に合わず置きっぱなしにすることが何度かあり、夜中の書庫に幽霊が出るなんて噂が一部に広まった。
だが、唯一俺の夜間読書を知っている奴が居た。
髭（父様）だ。
風の魔法は探知系が充実しているらしく、母さんが言うには髭は凄腕の風のメイジらしい。

「しょこにゆうれいがでるってほんとう？」
「ええそうですよ。足音が聞こえたとか、整理されているはずの本が床で開かれてるとか」

「ふしぎだね～」

書庫通いで馴染みになった巡回兵士と件の噂話をしていた。
兵士はその時のことを思い出だしたのか。少し顔が蒼くなった。
まさか、その幽霊の正体が目の前に居るとは思わないだろうな。

「ん？　マルクではないか。今日は書庫はいいのか？」

兵士と立ち話しているところに髭が通りかかった。兵士はすぐに仕事の顔に切り替えた。

「きょうは兵士さんとおはなしです」
「そうか。それで何を話していたんだ？」
「はっ。書庫の噂について少々」
「ああ、あの噂か。幽霊がどうとかいう」
「はっ。根拠のない話をご子息にしてしまい申し訳ありません」
「いや構わない。しかし、書庫の幽霊か……　私も聞いているよ。何でも難しい本ばかり開かれて落ちていることがあるのだとか」
「はっ！　その通りです。私も何度か目にしました」
「くっくっくっ。さぞかし勤勉な幽霊なのだろうな。将来が楽しみだ」
「は？」

通髭が俺の方を見て、意味ありげに笑っていた。
そのとき直感した。
髭に幽霊の正体が俺だとバレている。髭にばれたのは悔しかった。
しかし、特に止める様子もないのでそのまま夜中の書庫通いは続いた。
だた、その一件以降は夜間の書庫の巡回が強化された。
巡回の間隔が2時間から1時間になり、人員も2人だったのが4人

になった。
巡回が強化されたことを別の兵士から聞いたことにして、どうして増えたのか馴染みの兵士に聞いた。

「ああ、なんでも旦那様の命令で増やされているんだよ」
「ゆうれいはみつかったの？」
「いやそれがさっぱり、今じゃ１時間おきに書庫へ回されているよ。そこまで警戒するなら巡回ではなく配置すればいいのに……」
「そうだねー」

やっぱり、髭の差し金か。止めたいなら直接言えばいいのに。
自発的にやめさせたいのであれば、兵士が言ったように巡回ではなく配置にすればいい。
それとも、俺が何処まで見つからずに出来るか試しているのか？
いいだろう。その挑戦受けてやる！　と決意した。
髭に対抗してますます気配を殺す技術と『絶対空間把握能力』を磨く俺であった。
闇に紛れられるように普段から黒ずくめの服を愛用し、気分転換にわざと姿を見せては逃げ切るという遊びもした。
おかげで、『絶対空間把握能力』の把握範囲もずいぶん広がった。
もう、書庫にいながら屋敷全体の空間を把握できるほどだ。
そして、そんな風に３年間を過ごし今に至る。

「まずは、杖の契約からですね」

魔法指南役メイジのランペールが、俺とジャン兄の前に各種杖を並べた。
ランペールはワルド領のメイジ私兵団の風系統の隊長らしい。
私兵団と言っても、総員で２０人くらいの小規模なもので、亜人討伐がなければ執政の補佐や夜間の巡回などが仕事だ。

ちなみに、夜間の巡回兵士の中で一番俺の気配に敏感だ。
何度か追い詰められて見つかりそうになったくらい。
俺と同じ誕生日のジャンは、昼生まれと言うことで兄と言うことになっている。
俺は夜生まれらしいが、本当のところは母と出産に立ち会った医者しか知らない。
そんなことは置いといて、目の前に並べられた杖に目を輝かせる。
これが魔法使いとしての第一歩になる。
並べられている杖は、短杖（ワンド）・長杖（スタッフ）・指輪（リング）・杖剣（ブレードロッド）の４つだ。

「杖にはそれぞれ長所と短所があります。例えば、短杖（ワンド）は小さく動きを阻害しませんが、接近を許した場合は武器になりえません。その点、杖剣（ブレードロッド）は、武器と杖をあわせたもので、使い勝手がいいですが魔法も剣術も両方使えなければ意味がありません」
「うむ。俺は杖剣にするぞ」
「僕は、指輪がいいな」

ジャンがレイピア風の杖剣、俺が指輪に決めた。

「お二人ともそれでよろしいのですね？　杖はメイジの半身。壊れて再契約するときに別の種類にすると慣れるまで大変ですから、後から変えるのはお勧めしません」
「構わない」
「大丈夫だよ」
ランペールは頷いて、契約の手順説明に移った。
俺とジャン兄は半月掛けて契約を済ませた。
これって結構早いらしい。普通は半年、遅いと1年掛かることもあるのだとか。

「では、まず簡単なコモンマジックから始めましょう」

「ちょっと待てくれ。ランペール」
「ジャン坊ちゃま、どうかなさいましたか？」
「先に、系統魔法を調べてはダメか？　剣の訓練の参考にしたいんだ」

俺が書庫にこもっている間、ジャン兄は外で遊び、次第に剣を振り回すようになり、成長するにつれて本格的な稽古に変わった。
今では、剣術の先生つきで稽古している。
もちろん、俺は未だに書庫にこもりっぱなし。
母さんや髭にはたまには外で遊べと言われる。
そんな感じで、今日まで食事のとき以外、ジャン兄と顔を合わせなかった。

「もちろんかまいませんが、マルク坊ちゃまはいかがなさいます？」
「じゃあ、僕もジャン兄と一緒で」
「かしこまりました。それでは系統魔法から行きましょう。まずは風から行きましょうか。お二人とも旦那さまの血をついでいらっしゃるなら風が一番可能性がたこうございます。実演して見せましょう『ウィンド』」

ランペールが呪文を唱えて短杖を振ると風が俺とジャン兄に吹いた。

「ウィンドは風の魔法の基礎で、このように風を吹かすものでございます。まずはジャン坊ちゃまから」
「『ウィンド』」

ジャン兄が呪文を唱えて杖を振ると、ランペールのものよりも弱い風が吹いた。
本人も1発で成功するとは思っていなかったらしく、始めは驚いていたが徐々に実感したのかガッツポーズまでしていた。

「ジャン坊ちゃまは風の適性がおありですね。次はマルク坊ちゃま」
「うん。『ウィンド』」
呪文を唱えてもなにも起こらない。
さすがに、1発成功はしなかったか……
「もう一度やってみましょう。目標を決めてそこに向かって風が吹くイメージです」
「『ウィンド！』」
ランペールを目標に何度も力強く呪文を唱える。
10回ほど唱えてようやく、わずかな風が吹いた。
これはどうなんだろう？　適性はある方なのだろうか？
「風の適性はあるようですが、あまり高くはないようですね」
「そうか」
オブラートに包んではいるが、少し残念そうな表情を俺は見逃さなかった。
書庫で呼んだ限り、魔法の系統は遺伝する。
母様は平民だ。血で言えば髭の得意な風系統が最も相性がいいはず。
それがダメとなると、他の系統も望み薄だろう。
「では、他の系統も試して見ましょう。風系統だけがすべてではありません。歴代の当主様の中には風以外の使い手もおりました」
「うん」
系統魔法を一通り試した結果、ジャン兄は風と水にかなり適性があった。

俺はというと、わずかなに風と土に適性があった。
ジャン兄の母、ディアナさんは水の使い手らしい。
羨ましいな。と思いつつ、自分の適性をどう成長させるか悩む俺だった。

第3話『魔法の授業？』

1週間のうち、4日間魔法の授業があり、朝は風の魔法とコモンマジックを、ジャン兄と共にランペールに習う。
午後は2日は第二の得意系統魔法をそれぞれ別のメイジに、残りの2日で他の系統を教えてもらう。
土魔法はドングという筋肉質のオッサンから習っている。

「違う違う。錬金はもっとこうがーっと腹に力を貯めて、一気に練成するんだ」

うん。さっぱりだよドング。
ドングは土系統の副部隊長で豪快な性格をしている。
ぶっちゃけ教えるのに向いていない。抽象的すぎて理解できないのである。
おかげで、最近は書庫で土系統の本を読み直してほぼ独学で勉強している。

「えっとこう？　『錬金』」

握った小さい石ころに錬金の魔法かけた。
手を開くと石ころは同じサイズの青銅に変わっていた。

「おう、やれば出来るじゃねえか。ま、俺の教え方がいいから当然か！」

そんなわけないだろ！　こっちは昨日一晩ずっと練習してたんだよ。
おかげで、青銅を錬金するだけで精神力がすっからかんだ！

「しっかし、なんで錬金なんだ？　土系統なら他にもゴーレムとか色々あるだろう？」
「そんなに力ないよ。こうやって錬金をするだけで一苦労だし、力が少しかないのに他の魔法に手を出しても無駄になりそうなんだ。それなら何か１つを極めた方がいいと思って」

話し方に関しては本を読みまくっているのが周知の事実であり、大人と普通に会話していても難しい言葉を使わなければ怪しまれることはなくなった。
ジャン兄はジャン兄で、髭のマネをして大人びた口調で話すので、俺のことなど余計に目立たない。
まぁ、ドングはあまりそういうのを気にするタイプじゃなさそうだが。

「なるほど。そんじゃ、錬金をガンガンこなすぞ！　最終目標は金の練成だな」
「それは無理じゃない？」
「なせばなる。才能がないなら努力で補え。精神力なんざ気合と根性で何とかしろ」

無茶苦茶である。
夜間の自主トレもあり、昼の系統授業が始まることにはろくに精神力が残っていない。
精神力が切れた後は、授業が終わる時間までドング相手に徒手空拳の特訓。
きっかけは、ジャン兄が剣術の稽古をしていることだった。

「もうだめ。精神力からっぽだよ」
「むう。まだだいぶ時間が残っているんだが、そういえばジャンは剣の稽古をしているんだったな」

「そうらしいね」
「向こうが稽古しているなら、こっちも何か稽古しないとな」
「なんの稽古するの？　ジャン兄と同じ剣？」
「同じじゃつまらんだろう。それに、俺は剣も槍も使えない」
「じゃあ何の稽古するの？」
「素手だな。それなら精神力も要らんし、指輪が杖のお前には丁度いいだろう」

ドングの授業は魔法よりもこっちの割合が多い。
９：１くらいだろうか。もちろん、９が徒手空拳の特訓だ。
まあ、精神力を減らしてから授業を始める俺が悪いんだが……

「おら！　脇が甘い」
「はい！」

俺のパンチを軽々と避けたかと思えば、足払いを仕掛けてくる。

「今度は足元がお留守だぞ！」
「うわっと」

ジャンプして足払いを避ける。

「なかなかいい反応だ。だが空中に逃げるというのはいただけない」
空中で回避できず、咄嗟に腕を交差して身を守る。
そこに強烈なパンチが飛んできて吹っ飛ばされた。

「おら、立ちやがれ！　敵は待ってくれないぞ！」

魔法の授業の時とは別人のような厳しさだ。

倒れている俺に追撃を仕掛けようと近づいてくる。
俺はすぐに起き上がって構えを取った。

「そうだ。それでいい。続けるぞ！」

そして再び、ドングと殴り合った。
ドングって、絶対こっちの先生のほうが向いてるよ。
魔法を教えるより何倍も的確だもん。
そんな生活を2年続けた。
ジャン兄は、風がラインの中、水がドットの上、他はドットの中まで成長した。
俺の方はというと、風がドットの下から一向に成長せず、土がドットの中になった。
ちなみに、ジャン兄の水の練習には俺の手当ても含まれていたりする。

「まったく、毎日毎日怪我しすぎだ。治す方の身にもなれ」
「そういうことはドングに言ってよ。ジャン兄」

ジャン兄とは魔法の授業を始めた辺りから仲良くなった。
最初はお互いに話しこそしなかったが、やはり同時期に魔法の練習を始めた相手のことが気になる。
訓練の成果や魔法の話をしているうちに自然と仲良くなった。
今では、ドングとの特訓の後に、水系統の練習として傷を治してもらうくらいになっている。
ドングと初めてやったときは、手加減を間違い重傷を負った俺を、水のメイジであるディアナ様に治療してもらわなければならなかったくらいだ
いくら的確に教えてくれるとはいえ、あれは5歳児にするような特訓じゃないと思う。

「ほれ、終わったぞ」
「いつもありがとう。ジャン兄。それじゃ、始めようか」
「おう。いつも通り魔法ありで行くぞ。加減はするけど怪我するなよ？」
「うん！」

お互いに距離をとり構えた。
午後の授業が終わった後、俺とジャン兄は模擬戦と称して、戦っている。
お互いに授業を終えて精神力はあまり残っていない。
俺に至ってはドングの授業で精神力が気絶寸前、その後の特訓で肉体的にもフラフラだ。
実戦では１０できることが１しか出来ない。
だから、フラフラの危機に近い状態で訓練を行ってこそ真価を発揮できる。と髭が言っていた。
それを聞いた俺とジャン兄は、毎日こうして戦っている。
俺の方は、風はジャン兄に力負けしているが、土は錬金一点に訓練を集中したため、少量の鉄なら錬金できるようになった。
もっとも、フラフラの今じゃ、そんなの関係ない。

「いつも通り、コインが落ちたらスタートだ」
「いつでも！」

ジャン兄がコインを投げる。
くるくると空中で回転しながらコインが落下した。
俺は、コインが音を立てた瞬間に一気に距離を詰める。
ジャン兄は、先生の方針である程度精神力を残して授業を終えているいる。
俺の治療で多少は消費するが、２、３回くらいなら魔法を使える。

俺はそんな余裕はない。それこそ魔法を1回でも使えば倒れるレベル。

「『ウィンドブレイク』」

吹き飛ばしの魔法を打ってきた。
一旦吹き飛ばしてさらに魔法を唱えるか、それとも体勢が崩れた隙に追撃を掛けるつもりか……
が、それはあくまで吹き飛ばされ時の話だ。
倒れこむように耐風姿勢をとった。
姿としてはｏｒｚのような格好だが。ジャン兄くらいのウィンドブレイクならこれで十分耐えられる。
風が過ぎ去ると、すぐにクラウチングスタートの姿勢をとり、走って距離を詰める。
接近戦では、後から始めたにもかかわらず、俺の方が遥に錬度が高い。
ドングのスパルタ特訓の賜物だ。
ジャン兄のもつレイピアのような杖剣は、懐に潜り込めば役に立たなくなる。
拳をジャン兄のアゴに当たる寸前で止めた。

「……まいった」
「やった！　これで今晩のデザートはいただき」

実は、この模擬戦で夕飯の後に出るデザートをかけていたりする。
今のところ勝率は、3割くらい。
ジャン兄は作戦を考えて、俺が作戦を破る方法を考える。
同じ作戦は使ってこないから、1つの作戦につき1勝しかできない。
初見の作戦ではまず負ける。たまに運良く即対処できて初見勝ち出来るくらい。

それに魔法が使えない以上、どうしても先手をとることを前提に作戦を立てないといけない。
『絶対空間把握能力』で見えにくい風の範囲を見破ることも出来るが、風系統は攻撃範囲が広い魔法が多い。
先手を取られれば、避けられない魔法が飛んできて即終わりだ。

「まさかあんな姿勢でウィンドブレイクに耐えられるとは、今日のデザートが好物でないことを祈るか……」
「いや、さすがに何回も使われれば対策を考えるよ。魔法で対処できればいいんだけど、精神力ないし、あっても僕の風じゃ力不足だしなぁ」
「お前ならメイジ殺しでもやっていけるのではないか？　魔法なしでも私を倒すことが出来るのだから、このまま成長すれば万全の状態でも負けるかもしれないな」
「うーん。どうだろう？　トライアングルクラスのウィンドブレイクだったら吹き飛ばされてたと思うよ？　やっぱり、魔法には魔法で対処するのが一番だと思う」
「なら、私達が組めば最強ではないか？　私が呪文を唱え、お前が接近する敵を倒し、相手の魔法を封じる。まるで使い魔と主のようだな」
「はは。さすがに使い魔はやだな。ジャン兄とファーストキスはゴメンだよ」
「たしかに。私もそれは遠慮したいな。人とキスすなら結婚相手が最初と決めているのでな」
「どんな人と結婚するのかな？」
「さあな。そのうちパーティーか魔法学院で出会うんじゃないか？」
お互いにまだ見ぬ相手を想像しながら、屋敷に戻った。

第4話『2人？との出会い』

今日は、ドングと街に来ている。
今日の授業でドングの急所に一撃入れることができたのだ！
もちろん、急所に当てようとも俺の力でドングは倒せない。

「ふはははは。まさかもう一撃入れられるとは。成長したなマルク」
「いや、あれはまぐれだと思うよ？」
「そう謙遜するな。まぐれであれなんであれ、俺は防げなかった。運も実力のうちだ。よし、今日は早めに切り上げて記念に武具でも買うか！」

そう言われて、一緒に買い物に出たのだ。
ドングは表通りから1本外れた裏通りの武具屋に俺を案内した。
看板には、エリンデル武具店と書かれている。

「爺さん、邪魔するぜ！」
「ああん？　ドングの若造、何のようだ？　また武器壊しやがったか？！」

店のドアを開けると備え付けのベルが鳴り、奥から眼鏡を掛けた白髪のお爺さんが出てきた。
お爺さんはドングを見るなり、怒鳴った。

「違げぇよ。今日はコイツにあった武器をを買いに来た」
「ああ？　誰だこいつ？　お前の餓鬼か？」
「総隊長のとこの次男で俺の教え子だ」
「ああ？　テメェの教え子だァ？　んなもん出来るわけねぇだろ。育つ前に死んじまうのがオチだ」

お爺さんの言うとおりだ。何度骨が内臓に刺さったことか……
ディアナさん、その節は大変お世話になりました。

「ともかく、合いそうな武器を見繕ってくれや」
「しゃあねぇな。おいチビ助、こっちに来て腕を出せ」

腕を出すと撫でたり摘んだり叩いたり。割と痛い。
こんなことして何がわかるのか疑問だ。

「ほう。子供にしてはいい体してるな。無駄な筋肉もついてない。
ドングの教え子ってことは、格闘系か？」
「あ、はい」
「となると、セスタスとスパイクブーツあたりか……　ちょっと待ってな」

ブツブツ言いながらお爺さんは奥に引っ込んだ。
確かセスタスは拳につける金属製の手甲で、スパイクブーツは脛まである金属ブーツだったかな？
書庫の本で見覚えがある。
あんまり重くないといいんだけどな。
重いとドングの攻撃避けられないし、タダでさえ遅い攻撃が余計に当たらなくなる。

「ねぇドング。あのお爺さんはドングの知り合いの？」
「まま、そこそこ付き合いは長いな。あの爺はこの辺りじゃ有名な目利きでな。客に最も見合った武器を選んでくれるって評判だ。もっとも、この店は爺が選んだ武器しか売ってくれないがな」
「じゃあ、俺の武器も爺さんが持ってくる物で決定なの？」
「だろうな。それ以外売ってくれん」

「そっか」

店の中に所狭しと並べられた武具を見て呟いた。
ガラスケースに収まった赤い刀身の剣とか螺旋が刻まれた三角錐の槍とか、使うかどうかは別にして一度持ってみたかったんだけどな。
本でも見たことのない武器を爺さんが戻ってくるまで１つ１つ見て回った。

「あれ？　これ……」
「ん？　なんか珍しい物でもあったか？」
「いや、これなんだけど」

店の端に隠れるように展示されていた黒と赤の大型拳銃。
それを見て、ふと前世の修学旅行でアメリカに行ったときのことを思い出した。
旅行のコースに射撃があり、俺が撃とうとした時は、みんな誤射されないように逃げ出したものだ。
『絶対空間把握能力』で的や人の位置はわかるから、間違っても撃つことはないんだけどな。
弾丸の弾道も１回撃てば判るから、初弾以外全部当てて、周りを驚かせたのはいい思い出だ。
それが原因で一時、銃にのめり込んだ。銃は俺の数少ない趣味の１つだ。
最もエアガンはつまらなかったので、もっぱら実銃専門だが……

「この世界にも銃があるんだね」
「この世界？」
「いや、この街にも……ね。でも、平民に渡ったら危なくない？
メイジとかイチコロだよ？」
「はっはっはっ、面白いことを言うな。メイジが銃に負けるわけな

いだろう？」
「なんでそう言い切れるの？」
「そりゃ、銃が弱いからさ。1発だけなら強力だろうが、防がれたが最後、装填する前に魔法でやられるのがオチだな」

もしかして、この世界の銃はまだ未発展なのだろうか？
江戸時代の火縄銃みたいに、装填に時間がかかるなどの理由で連射が出来ないのかな。
けど、それでも十分脅威だと思うけど……

「銃弾もドットクラスのシールド魔法で十分に防げるからな。相対しても耐えられる」
「でも、魔法が間に合わなかったら？　不意打ちとか」
「不意打ちは別だろう。それは銃だろうが魔法だろうが関係ない。武器が何であれ不意打ちは有効な手段だからな」
「確かに」
「で、第2弾。装填と魔法の詠唱、どっちが早いかと言えば当然魔法だ。メイジ殺しでもない限り、初歩の攻撃呪文でも十分脅威だ」

やっぱり未発達のようだ。
他の銃ならいざ知らず、現代の銃の連射性と威力なら魔法使いなど歯牙に掛けないだろう。
と、話していると爺さんが奥から出てきた。

「あいよ。チビ助に合うセスタスとスパイクブーツだ。サイズ調整もしといてやったぞ」

乱暴な言葉とは裏腹に、しっかりと調整されたセスタスが目に入った。
ツンデレ？

「サンキュー爺さん。でいくらだ？」
「まとめて２００エキューってとこだな」
「ねぇ、お爺さん」
「なんだ？　値引きならせんぞ」
「いや、この銃触らせて欲しいんだけど？」
「ん？　お前さん、銃に興味があるのか？」
「まあ、それなりに」
「はっうれしいね。銃は魔法に劣るとか言われてるが、わしはそう思っちゃいねぇ。むしろ、魔法よりよっぽど強いと思っとるよ」
「そうだね。連射さえできれば、メイジにとって脅威になるね」
「ほう。わかってるじゃねえか。気に入った！　今開けてやる」

お爺さんがカウンターに持ってきた武具を置いて、展示ケースを開けてくれた。

「こいつは骨董品屋に並んでるのを見つけたんじゃ」

２丁の大型拳銃は銃身にルーンが刻まれていた。
ルーンも一通り覚えているけど、銃に刻まれているルーンは見たことがなかった。
お爺さんは俺に２丁の大型拳銃を渡した。
ずっしりと重みがあり、本物であることを教えてくれる。

「おや？」
「あら？」

握った瞬間、声が聞こえた。

「え？　ドング何か言った」

「は？　なんも言ってないぞ！」
「じゃあ、お爺さん？」
「ワシが何じゃ？」

いや、２人じゃない。そもそも声が違う。
女の声だ。でも、店の中にそれらしき人はない。
一体何処から聞こえる？

「ようやく、見つけたのじゃ」
「ええ、ようやく見つかったわね」
「「「？！」」」

確かに聞こえた。ドングとお爺さんも聞こえたのだろう。
キョロキョロと周りを見回している。

「こっちじゃよ」
「こっちですわ」

声のした方を見ると、俺が握っている大型拳銃から聞こえるようだ。
もしかして、銃が喋ってるのか？
この世界は前世の非常識で溢れている。
魔法にはもう慣れたけど、魔法があるくらいだ。
喋る銃が合ったっておかしくない。

「なんこれ！？」
「なんだ。こりゃ！？」
「わしもはじめて聞いたぞ！　この銃、喋りおるのか！？」
「銃とは失礼じゃな。まあ、見た目はそうじゃが……　わしにはちゃんとネヴァンという名前があるわい！」
「わたしはマーハよ」

拳銃が揃いも揃って名前を口にした。
黒い銃がネヴァン、赤い銃がマーハという名前らしい。

「もしや、インデリジェンス武器かの？」
「インテリジェンス？」
「ああ、聞いたことがあるな。意志を持った喋る武器だったか？」
「じゃが、今まで何度も手入れしておるが喋ったことなど一度もなかったぞ」
「それはそうじゃ。さっきまで寝てたからのぅ」
「ええ、私達の使い手が現れるまでずっとね」
「で、なんで今は起きてるの？」
「「そりゃ、あなたが私達の使い手だからよ」じゃよ」

「いや、使い手も何も、銃なんてあんまり触ったことないんだけど」
現代なら触りまくったけどな。
目が見えなくても、分解・組み立ても出来るくらいに！
慣れってすごいよな。

「でも、私達の眠りを解けるのは、使い手だけよ？」
「大丈夫じゃ。今は使えなくても将来使えるように調きょ……じゃない、特訓すればよいのじゃ」

いま調教って言おうとしなかったか？
大体、この銃はお爺さんのであって、俺のじゃない。
お爺さんは俺に合う武器としてこの銃を持ってこなかった。と言うことは、俺はこの武器に向いていないんだろう。
２人（？）には悪いけど、ここでお別れた。

「悪いけど、君達の持ち主はこっちのお爺……」
「チビ助、いや、銃の主よ。どうか、この2人を持って言ってはくれんか？」
「え？」
「おいおい、爺さんいいのかよ？　これあんたのお気に入りだろ」
「かまわん。店の片隅で埃をかぶらせるよりも、使う者の手にあるほうが武器も幸せだろう。それに、武器自体が使い手と認めるのだ。持っていってやってくれ」
「僕としては嬉しいんですけど、本当にいいんですか？」
「かまわん。なんなら、わしが持ってきた武具をタダでくれてやってもいい」

お爺さんは真剣な表情で俺を見ている。
その目から銃を手元に置いておこうという意志は見えなかった。
おそらく、どれだけ説得しても無駄だろう。
お爺さんが選んだ武器しか売らないように、この銃をなんとしても俺に持っていて欲しいのだろう。

「判りました。ですが、武具の代金は支払います。この銃の代金もいつか俺が稼いで持ってきます」
「ありがとう」

さすがに銃の分までドングに出してもらうわけにはいかない。
銃の代金は、いずれ俺がお金を貯めて払おう。

「これからよろしく。ネヴァンにマーハ」
「これからよろしくのぅ。主殿」
「よろしくね。主様」

こうして、セスタスとスパイクブーツ。おまけにネヴァンとマーハ

と言う大型拳銃を手に入れた。
正直に言ってにやけを我慢するので大変だった。
まさか、この世界で現代の銃に会えるなんて思わなかった。
帰ったら早速分解して手入れしてみたい。

「ところで弾はどうするんだ？」

帰り道でドングが重要なことに気付いた。
そうだよ！　弾ないじゃん！
この世界の弾じゃ規格が合わないだろうし、弾がなければ撃てない。
いっそ錬金で自作するか？　でも、自信ないな。
大体、そんなことが出来るなら、部品から銃を作っている。

「それなら心配無用じゃ」
「そうなのか？」
「ええ、私達は実弾を必要としないわ。主様の魔力を使って弾を作るから」

てことは、魔力が続く限り連射可能？
どんだけー

「ちなみに今の魔力でどのくらい撃てる？」
「そうじゃな。　……ざっと２０発ってところかのぅ」

現代なら普通だけど、この世界でそれだけ連射できるって規格外もいいところじゃないか？
これは、あまり人に知られないようにした方がいいかな。
今のところ俺しか使えないとは言え、物騒すぎる。
髭やディアナ小母様が知ったら、取り上げそうだし、他の使い手の手に渡ってもまずい。

ただでさえ、インテリジェンス武器と言うだけでも目立ちそうなのに……

「ねぇ、ドング。これ貰った事他の人には内緒にしてくれない？」
「なんで？　インテリジェンス武器を持ってるなんてすごいじゃねぇか。しかも、武器に認められてるんだぞ。何で隠す？」
「ほら、珍しいもの持ってると狙われそうじゃない？」
「そりゃまあそうなだ」
「だから、最低でも意志があるってことだけは内緒にして欲しい」
「まあ、それくらいなら……」
「その必要はないのじゃ」

ネヴァンが会話に割り込んできた。

「なんで？　インテリジェンス武器って珍しいんでしょ。奪われたりしたらどうするのさ」
「それなら、銃で居なければいいだけの話ですわ」
「「は？」」

言っている意味がわからない。
銃なのに銃じゃなければいいって何？

「少し人の居らぬところへ言ってくれんか？」
「そうですわね。あまり人目につくとそれこそ騒ぎになりますわ」
「「？」」

俺とドングはよくわからないまま、言われたとおりに人通りの少ない郊外に向かった。

「ここならいいじゃろ」

「そうですね。人目もないし、大丈夫ですわ。主様、私達を地面に置いてください」

言われたとおり地面に銃を置くと2人が光りだした。
光は人の形になり、光が消えるとそこには黒いドレスを着た黒髪の妖艶な美女と赤いドレスを着た真紅(あか)髪の凛々しい美女が立っていた。
どっちもかなりの美女だ。
俺の横で見ているドングなど、始めはアゴが外れたような間抜けな顔をしていたが、今はうっすら頬を染めている。
うん。言っちゃ悪いけど気持ち悪いよ。ドング。

「ふむ、人の姿になるなど何百年ぶりじゃろうな」
「本当に、変身の仕方を忘れていなくてよかったわ」
「えっと、ネヴァンにマーハなの？」
「そうじゃが」
「そうよ。どこかおかしいかしら？」

いやもうホントに非常識の塊だね。この世界。
銃が意志持ってて、おまけに擬人化？　なんでもありかよ。この世界……

「これなら傍に居っても問題ないじゃろ？」
「いや、むしろ状況が悪化してるようにしか思えないんだけど」
「どうして？　人の姿なら身近に居ても問題ないでしょう？」
「いや、人の姿の方が大変だよ。銃なら隠せばいいけど人なんて隠せないよ！」
「おっほん。まあ、手がなくもないな」
「どうするのさ」
「ちょっと耳かせ」

2人に聞かれないように少し離れて密談を始めた。

「で、どうするのさ」

「簡単だ。お前つきのメイドにしちまえばいい。俺の紹介ってことにすれば総隊長も許可しやすいだろうしな」

「……で、要求は？」

さっきの表情を見る限り、なにかしら要求があるのだろう。

ちなみに2人に変なことをするようなら、一番最初の的がドングになる。

「察しが良くて助かるな。俺との訓練のときに2人を連れてきてくれ、あんな美人を拝めれば目の保養になる」

「それだけ？」

「ああ」

話がまとまったところで2人にメイドとして傍に居るよう頼み、2人とも了承してくれた。

ドングが手はずを整えるまでは俺の武器として持ち歩くことになった。

第5話社『交界デビュー前に？』（7歳）

ネヴァンとマーハをメイドにしてから2年の月日がたった。
ドングの紹介と俺の希望により、あっさりと俺専属のメイドになった。
俺の部屋にいる時や一緒にいられないとき以外は、常に人の姿で俺の傍にいる。
そういえば、書庫の幽霊の噂だが、夜中に銃の訓練を入れたせいで、書庫に行く時間がなくなり、自然に消えた。
もう全部読破したから今更通う必要もない。
訓練を始めてから、2人の特性がわかった。
ネヴァンの方は、どういう原理か知らないが精神力を実弾に変えて発射するらしい。
今の精神力なら撃てる弾数は２０発前後。
マーハの方は、魔法弾とでも言えばいいのだろうか？
詠唱入らずで引き金を引けば、適性によらずファイアー・ボールやエア・スピアーといった攻撃系の魔法が撃てる。
しかも、消費する精神力を増やせば威力も上がるらしい。
俺の精神力なら、１発の消費を最小にするとドットクラスの魔法が１０発撃てる。
さらに、どちらも無反動で連射可能ときた。
もはや規格外って言葉すらしょぼく感じる。

と、いうわけで、精神力の増強も兼ねて、精神力が切れるまで撃っては、人化した2人に寝室へ運ばれている毎日を送っている。
そんなある日……

「お2人とも、今日は魔法の授業はありません。お出かけの準備をしてください」

ランペールが授業がないことを俺とジャン兄に伝え、それぞれ本家の使用人に案内された。
ちなみに、２人（ネヴァンとマーハ）は銃の姿で俺の腰に下がっている。

「なにかあるんですか？」
「なんだ。マルクは聞いてないのか？　今日は私達の社交界デビューの日だぞ」
「初耳です」

いくらジャン兄と仲良くなったとは言え、妾の子であることに変わりはない。
パーティーに出ることになるとは思わなかった。
事実、母さんは妾の子が社交界に行くなど、粗相でもしたら大変だ。と慌てたが、髭とディアナさんに押し切られる形で参加することになった。
いつもの黒服では地味すぎると堅苦しい服を着せられて正直息が詰まりそうだ。
セスタスはもちろん銃も、家に置いて行くように言われたが、２人（ネヴァンとマーハ）はこっそり服の下に下げている。
だって、あの２人。銃でダメなら人の姿でついて行くって言い出すんだもんな。
ドングはおろか、男の使用人達の間でアイドル的存在の２人をパーティーに連れて行けばどうなるか……
想像するだけで面倒だ。
母さんから「くれぐれも粗相をしないように！」と言い含められて、屋敷を出た。
行き先はラ・ヴァリエール公爵領と言って、ワルド子爵領のすぐ隣だ。
なんでも、髭と公爵は親友なのだとか。

5時間ほど馬車に揺られてヴァリエール公爵の屋敷に着いた。
すごく大きい。本宅の3倍いや5倍はあるだろうか。
迷子になったら出てこられないんじゃないかと思うような規模だ。
髭が入り口で執事と2言3言交わし、案内される。
俺とジャン兄も一緒についていく

「今からヴァリエール公爵とそのご息女に会う。くれぐれも粗相をしないようにな。それと自己紹介は自分達でしなさい」
「はい。父上」
「わかりました」

案内された部屋には、モノクルをはめた金髪のオッサンと胸が残念なピンクブロンドの女性、その周りに2人の髪の色をした女の子が2人座っている。

「おお、ワルド子爵久しいな」
「お久しぶりです。ヴァリエール公爵。今宵はお招きいただきありがとうございます」
「そう畏まるな。ここはパーティー会場ではない。楽にしてくれ」
「ありがとうございます」
「してその2人が？」
「ああ。我が息子のジャンとマルクだ。ほら2人とも挨拶しなさい」
髭に促されて、ジャン兄からヴァリエール公爵の前で自己紹介をする。

「はじめまして、ヴァリエール公爵。ワルド子爵が長男ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドと申します。以後お見知りおきを」
「同じく、ワルド子爵が次男マルク・ザミル・ド・ワルドです」
「二人とも礼儀正しいな。こちらも紹介せねばな。エレオノール、

カトレア」

ヴァリエール公爵が女性の隣で座っていた金髪とピンクブロンドの女の子に声を掛けた。

「初めまして、ジャン様マルク様、ヴァリエール公爵家長女エレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと申します」

「次女のカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです」

「おお、お二人ともお美しくなられた」

髭が娘2人を絶賛している。

確かに、俺の目から見ても2人はかなりの美人だ。

エレオノールさんは、ディアナさんのような凛々しい系、カトレアさんは優しい系だな。

「そちらの方は、ヴァリエール公爵の三女ですか？」

俺は後ろに座っている残念な胸のピンクブロンドの女性に尋ねた。

それを聞いた髭と公爵の笑顔が固まった。

「……ヴァリエール公爵夫人、カリーヌです」

公爵夫人からものすごい威圧感というか殺気を感じる

それが、俺に思いっきり向けられている。

もしかして、地雷踏んだか？　それとも残念な胸って考えたの読まれた？

まさかな……

「……」

やばい。絶対読まれてるよ！　さっきより殺気が強くなったもん。ていうか、なんでこの状態でヴァリエール公爵家の娘達は平然としていられるの？！
もしかしてここではこれがノーマル？

「さて、まだパーティーまで時間がある。部屋を用意するからゆっくり休むといい」
「そうですな。ではお言葉に甘えて……」
「そうですね。父上」

うん、2人とも棒読みだ。
公爵に至っては冷や汗らしきものまでかいている。

「おおそうだ。マルクは風のメイジなんだが、才能が乏しくてな。カリーヌ殿に見ていただいてはどうか？」
「それはいい。どうだい？　カリーヌ」
「ええ、いいですね。そうしましょう。幸いまだパーティーまで時間もあります」

カリーヌさんは笑顔で了承した。
この親父ども、俺を売りやがった。
二人の目が、「地雷を踏んだのはお前なんだか自分で処理しろ」と視線を送ってきやがった。
そりゃ、地雷を踏んだ俺が悪いけど、子供を売るか？　普通。
その

「マルクどうした？　お前もお願いしないか」
「……よろしくお願いします」

「ええ、よろしく」

怖い。笑顔がめちゃ怖い。そして目が笑ってねえよ。
あれは、今から訓練する目じゃない。獲物を狩る捕食者の目だよ！
出来るなら今すぐにでも屋敷に帰って母さんに抱かれて寝たい。
この先何が起こるかビクビクしながらヴァリエール公爵夫人の後をついて行った。

第6話『地雷の被害』

中庭には、ヴァリエール公爵にエレオノールとカトレア、ジャン兄と髭が観戦している。

「マルク・ザミル・ド・ワルド参ります」

「来なさい」

カリーヌさんは長い髪を後ろでまとめてポニーテールにしている。
それを見た公爵が一歩下がったのを俺は見逃さなかった。
なに？　そんなにやばいの！？
とはいえ、2人は使えない。
こんなところで使えば、今まで何のために隠してきたのか判らない。
かといって魔法を小出ししても、俺の弱風じゃ効くかどうか……
よし、あの手でいこう。
戦術を決めると、地面に手をついて呪文を唱えた。

「『武装錬金』」

土を鉄に練成し、さらに形を変える。
両手に鉄で出来たセスタスを纏った。
この魔法は、今みたいに武器がないときのために考えたオリジナル魔法だ。
普段は、お爺さんが選んだ武具があるしね。
まぁ、オリジナルと言っても錬金と形態変化を組み合わせただけだけど。
さらに呪文を唱えた。

「『サイレント』『ミラージュ』」

サイレントで俺の足音を消し去り、ミラージュで自分の幻影を3体作り出す。
サイレントを掛けたのは、足音で音でばれないようにするためだ。
偏在ならともかく、幻影は実体を持たないため、音で本体がバレる。
幻影3人と連携して殴りに掛かる。
どれが本物か判らないなら避けるしかないだろう。
俺は、幻影3体を使って誘導し、一撃を与える。
1体目が攻撃、間を置かずに2体目、少し体勢が崩れたところで3体目、3体の攻撃を避けきって体勢が完全に崩れた所を背後から本体の俺が殴りかかる。
もらった！
そう思った矢先、夫人の短杖が脇の下から俺の方を狙っていた。
嵌められた？！
いつの間に唱えたのか。短杖から放たれたウィンドで吹き飛ばされた。

「っく！」

とんでもない威力の『ウィンド』だな。
体勢を立て直して上手く着地する。
空中で体勢を立て直すのはドングとの特訓で散々やった。

「な！？」

体勢を立て直した時にはもう目の前にヴァリエール夫人が居た。

（主殿！　右に飛ぶのじゃ！）

小声でネヴァンのアドバイスが聞こえた。

「今度はこちらから行きますよ？　頑張って耐えなさい。エアハンマー」
「ちょ？！」
ネヴァンのアドバイスを信じて、地面を転がるようにしてエアハンマーを避けた。
さっきまで俺が居たところ５０サントくらい陥没してるんですけど！？
あれくらってたら、シャレじゃすまなくね？
（主様、次がきますわよ！）
「エア・スピアー」
今度は風の槍が飛んでくる。１本だけ？
いやいや、ざっと見て１０本以上あるよ！　避けられるかコンチクショウ！
『空間完全把握能力』で槍の軌道は見切れても、それに体がついてこない。
最初の１・２発は避けられてもその後が続かない。
「『エア・ガントレット』」
これもオリジナル魔法。エア・シールドをセスタスに纏わせて、迫りくる風の槍を叩き落す。
叩き落すと言うよりは、エア・シールドが掛かったセスタスで防ぐと言う方が正しい。
「はあはあ……」
避けられなかった残りはすべてセスタスで受けきった。

「中々やりますね」
「おーい、カリーヌそろそろパーティーの時間だ」
「時間も余りないようですし、決着をつけましょう。『カッタートルネード』」
（主殿逃げるのじゃ！）
（主様逃げてー）
「は？」

短杖から放たれた未知の風魔法が迫る。
あんなもん『エア・シールド』や『エア・ガントレット』で防げるか！

「武装錬金・シールド」

並みの盾では防げないと思い、残りの精神力の大半を使って鉄製の盾を3重に作った。
うん。ありえねぇ。
鉄が紙切れみたいに切られ宙に舞った。

（主様、私を撃って！）
「いや、でもそれじゃあ隠した意味が……」
（撃たねば死ぬぞ。主殿）

幸い、『カッタートルネード』が起こす強風で観戦している面々は目を瞑っている。
今撃っても見られるのは、夫人のみ。

「ですよねー。ああもう！　人の努力無駄にしやがって！」

うっかり素の言葉使いが漏れいるが、気にしている暇はない。
赤い銃（マーハ）を腰から抜いて、残っている精神力を込めて、撃った。
放たれたのは、風の魔法『トルネード』
『カッター・トルネード』に当たるが、多少勢いを殺したものの完全に打ち消せるはずもなく、容赦なく俺を襲った。
ズタズタに切り裂かれ、落下した。
だが、赤い銃（マーハ）だけは放さなかった。

第7話『地雷の先は地獄行きの超特急』

目を覚ますと、そこは見知らぬ天上だった。
はい。テンプレテンプレ
ここまで言ってテンプレかな。

「ここは……」

体を起こして周りを見ても、やはり見覚えのないテーブルとベットがあるだけの部屋。
なぜこんなところに居るのか。思い出せない。
たしか、ヴァリエール公爵家の家族に挨拶して、そのあと公爵夫人に稽古をつけてもらって……
あれ？　稽古どうなった？
幻影との連携をあっさり見抜かれて、『ウィンド』で吹き飛ばされて、それから……ああ、頭が痛い。
思い出そうとすると、頭が痛む。
……思い出さない方がいい事なのだろう。うん。思い出すのは諦めよう。

（主殿、目が覚めたか？）
「ああ」

俺の腰から外された2人が机の上に置かれている。

（主様、私の力不足で申し訳ありません）
「いや、俺なんでここにいるの？」
（覚えてないのですか？）
「何を？」

（マーハ、無理に思い出させぬ方が良い）
（それもそうですわね）
一体何があったんだ……
コンコン
ノックが聞こえた。
誰だろう？
「どうぞ」
「失礼します。お加減はいかがですか？　マルク」
入ってきたのは長女のエレオノールさん。
よく見るとエレオノールって、ヴァリエール公爵夫人に似てるな。
眼鏡を外して髪を短くしてピンクブロンドにしたらそっくりだ。
うん。胸の方もそっくりだ。
「今、何かおかしなことを考えませんでした？」
「いえ、別に」
鋭いところもそっくりだ。
「母様が心配してました。少しやりすぎたと」
「は？　何が？」
「最後に放った魔法です。地面に落ちたときはまるでボロ雑巾だったわよ？」
最後の……魔法？
……あああああ！　そうだ！　めちゃくちゃ切れ味のいいトルネー

ド食らったんだ。
うわー、今の今まで忘れてた。
思い出すと震えが止まらない。
我ながらよくちびらなかったと褒めてやりたいくらいだ。
しかも、あれで少しやりすぎた程度？　こっちは必死で防いだり、相殺したりしたのに！

「目が覚めたなら、パーティーへ参りましょう」

今、カリーヌさんとは顔を合わせたくない。
今会ったら、俺の意思に関係なく奇声を上げて全力で逃げ出しそうな気がする。

「いや、さっきの稽古の傷が……」
「傷は父上が完全に治療したはずですが、まだ痛むなら呼びましょうか？」
「いえ、大丈夫です」

く、どこかに逃げ道はないか。

「ところでこれはマジックアイテムですか？　これで魔法を使ったように見えましたが」

やばい見られてたのか。
どうやって誤魔化そう。

「なにやらルーンが刻まれていますね。やはりマジックアイテムですわね！」

机に置かれた2人にエレオノールが手を伸ばした。

咄嗟にベットから起き上がって2人が置かれているテーブルに飛んだ。

「それに触るな！」
「え？！」
「がばぶへ！」

机を巻き込んで床に転がった。
というか、壁に頭打った。痛い。

「急にどうしたんですか！？」
「いや、その。これは大事なものだからあまり他人に触られたくないんだ。だから、こうしてこっそり持ってきた」
「そうだったんですか。勝手に触ろうとしてすいません」
「いや、俺……僕の方こそ、大声出してゴメン」

とりあえず、2人を腰に下げる。
とはいえ、そんな物騒な物をパーティーに持ち込んじゃまずいよな。

「では、パーティー会場に行きましょうか。もう始まってますよ？」
「え、銃持ってるけどいいの？」
「あまり褒められることではありませんが、バレなければ問題ないでしょう」

そういって、俺に手を差し出してきた。

「会場までエスコートしてください。あなたのせいで遅れるのですから」
「わかりました。エレオノール」
「私はあなたより年上です！」

「これは失礼しました。エレオノールさん。これでよろしいですか？」
「ええ。それでは案内してください」
案内って言われても、会場がどこか知らないんだけど……
まぁ、『絶対空間把握能力』で人が多い所を探せばいいか。
んー、中庭に面した大き目の部屋に人がたくさんいるな。ここかな？
エレオノールの手を引いて会場に向かった。

「おお、目が覚めたか。マルク君。カリーヌがすまなかったね」
「いえ、力の違いと言うものを思い知らされました。失礼ですが、夫人のクラスは？」
「風のスクウェアだよ。その中でもおそらく最上位だろうね。私はカリーヌ以上の使い手を知らないよ」
「いい勉強になっただろう。最後の魔法、あれは公爵夫人最強の魔法だ。見たいと思って見られるものじゃないぞ」

公爵と話しているところに髭が加わった。
スクウェアの魔法が見られたのはよかったけど、くらいたくはなかったよ。

「そういえば、公爵夫人の姿が見えませんが？」
「ああ、カリーヌはあまりこういう場が好きではなくてね。自室にいるよ」
「そうですか」
よかった。顔を合わせずに済みそうだ。
「そういえば、珍しく褒めていたよ。最後の風は中々だったと」
「光栄です」

最後の風って、マーハで撃ったやつだよな。
あれは、俺の力なんかじゃない。
武器で得た力なんて、武器がなくなればそれまでだ。
それを褒められても嬉しくなかった。

「それと、くれぐれもカリーヌの前で胸の話題はしないようにな。おそらくあそこまで殺気だったのも、それが原因だろう」
「肝に銘じます。ですが、考えただけでアウトですか？」
「ああ、胸のことには敏感だからな」

まあ、会っても胸のことを考える前に今日の恐怖が蘇えってそれどころじゃないだろうけど。

「そうだ。忘れるところだった。マルクくん。ワルド子爵とも相談したんだが、1週間ほどここに住む気はないかね？」
「は？」

イマ、ナンテイッタ？　ココ　ニ　イッシュカン　スム？

「聞けば風系統の授業が上手くいっていないのだとか。そこで、カリーヌに見れもらってはどうかという話になってな」
「い、いえいえそんな！　僕如きのために公爵家の手を煩わせるなんてとんでもない！」
「そう言ってくれるな。ワルド子爵とは知らぬ仲でもない」
「そうだ。でしたら兄上を見てあげてください！　兄上は僕以上の風系統の使い手です。きっと、兄上の方が生かせるはずです」

ジャン兄を変わりに推しておいた。
冗談じゃない。1週間とはいえ、公爵夫人の傍にいるなんて耐えら

れない。
ここに居たら即座に逃げ帰りたいくらいなのに！
「では、２人とも招待しよう。お互いに切磋琢磨出来るだろう」
くっ、どうしよう！
逃げ道がない。なにか方法はないか……
「いいじゃないか。マルク。ヴァリエール公爵、このジャン・ジャック。謹んでお受けいたします」
横から出てきて余計なこと言うなー！
ジャン兄も、カリーヌさんの魔法見ただろ！？
それでよく魔法を教わろうなんて……だめだ、目が先輩に憧れる後輩の目だ。
そりゃ、見てる分にはかっこいいかもしれないが、受ける身にもなってみろよ！
トラウマ物だぞ。あれは。
「うむ。して、マルク君はどうするかね？」
「あ、いや……その。出来ればお断り……」
「話はまとまりましたか？」
その声を聞いてビクッと体が震えた。
振り返りたくない。
振り返らず、今すぐ逃げ出したい。
「これは公爵夫人。先ほどは息子がお世話になりました」
「いえ、なかなか見所がありそうでつい手加減を忘れてしまいました。どうしたんだ？　マルク。顔が青いぞ？」

「い、いえ、ダイジョウブデス」
「公爵夫人、ぜひ風のご教授をよろしくお願いします」
「ええ、あなたの弟ともどもしっかり鍛えてあげます」

いつの間にか、俺まで受けることになってるし！

「いや、俺は……なんでもないです」

はい。一睨みで黙らされました。

「では、また後日お会いしましょう」

カリーヌさんは言うだけ言って、会場を出ていった。
あれか？　俺が拒否しようとしたことを察知して、黙らせるためだけにきたのか？
いや、それは自意識過剰か。
実際ありえそうで怖いけど。
結局、来週から1週間、ヴァリエール公爵家で魔法強化合宿が行われる事になりました。
ううん。どうしよう。本気で家で考えるか……

第8話『偽りの出発時刻』

ドキドキヴァリエール家で修行（地獄巡り）合宿の2日前晩

俺は自室に篭って悩んでいた。
どうして、俺が修行に行かなきゃならないんだ。
才能溢れるジャン兄ならともかく……

ぶっちゃけ、俺に魔法の才能があるとは思っていない。
いや、才能がすべてではないけどさ。
母さんが平民で魔法の才能なし、髭が風のトライアングル。突然変異でもない限り、才能的はよくて風のトライアングル、酷ければ現状のドット。
風系統をジャン兄と比較すれば一目でわかる。
例えば、ジャン兄が1週間で使えるようになる呪文があるとしよう。
俺だと1ヶ月でも足りない。
これで才能があるというなら、どういう根拠であるのか教えて欲しい。
才能の次に必要なもの。それは、努力。
いくら才能があろうとも、努力しなくちゃ始まらない。
最初からトライアングル？　スクエア？
そんなのありねえよ。いたら天賦の才能を持っているか化け物だよ。
ええっと話がずれた。努力の話だった。
才能がなくても、文字通り血反吐を吐くほど努力すればドットクラスの才能しかなくても、トライアングルになれたりする。
あとは、おまけで精神力かな？
精神力は、個人で容量が決まっていて、基本的にはランクが上がるごとに増える。
ただ、筋肉と同じで酷使すれば筋肉痛の変わりに頭痛を経て、増や

すことが出来る。
もっとも、ランク上昇時のとは比べ物にならないほど微々たる量だけどね。
それを踏まえて今の俺は……

才能はさっき言ったとおりほとんどない。
ランペール曰く、今のペースで訓練を続ければ風系統はラインの中が限界かもしれないとのこと。
ドングは、「才能？　なにそれ美味しいの？」と努力でドットからトライアングルに上がった猛者なので教えてくれない。
というか、判らないんだろう。
努力は、まあしてるけど血反吐が出るほどじゃないな。
風系統はランパートにどんな魔法があるのか教えてもらい覚えたい
魔法を重点的に習い、土は俺の要望で錬金一択。
ジャン兄は広く浅くでとにかく使える魔法をが多い。俺より１０個くらい多く知っている。
土は錬金のみを練習している。
使うかどうかもわからない魔法をたくさん覚えるよりも、必要な呪文を極める方がいい。
この程度では、ランクを上げる努力とはいえないだろう。
ただ、精神力には自信がある。
ドングの授業で絞りカス寸前まで減らしてるし、最近はマーハとネヴァンの２人を扱えるように特訓している。
２人を使うには精神力が必要だ。
そのため、使い切って気絶したら、２人に寝室へ運んでもらっている。
ドットであるにも関わらず、ラインのジャン兄と同じくらい精神力がある。

で、今回のヴァリエール公爵家での修行合宿。

俺に何のメリットがある？
Q1．新しい魔法が覚えられるかも？
A．必要なし。今使える魔法を極めるのが優先の俺に新規魔法はよほど相性がいいものでない限り覚える気はない。今覚えてる魔法の反復練習で手いっぱいだし。

Q2．実戦訓練が出来る
A．あれは訓練というよりイジメ。いつ死んでもおかしくない訓練は訓練と呼べません！

Q3．ヴァリエール公爵家と仲良くなれる
A．なってどうしろと？　仲良くなるだけなら、わざわざ合宿に参加しなくてもいいよね！

Q4．もう一度死ねる
A．まだ死にたくありません！

うん。何のメリットもなくね？
公爵家で、銃の練習するわけにもいかないし。
やっぱりここは家出するしかないか。
明後日には、移動するから今日は準備だけして寝よう。そして明日の夜に逃げよう。
幸い、ドングからサバイバルの教育も受けている。その気になれば山篭りも出来る。
じゃあ、お休み……

うん。ここは何処だ？
目が覚めると見知らぬ天井の部屋。

いや、この天井は見覚えがある。
……ここは！

「おや、起きましたか？」
「な！？」

ベットの隣には、恐怖のあの人がいた。
俺をボロ雑巾にしてトラウマを植えつけた張本人、ヴァリエール公爵夫人カリーヌ。

「な…んで！？」
「あなたがパーティーの時に嫌そうな顔をしているので逃げるのではないかと思って、先手を打たせてもらいました。ああ、あなたの兄も一緒にきていますよ」

くそ。逃げようとしたことを見抜かれていたのか。

「改めて、ようこそ。ヴァリエール家へ。今日からみっちり仕込んであげますからね」

笑顔が怖い。
普通のちゃんとした笑顔なのに震えが止まらない。

「それと、あなたの父親からの伝言です。『息子達を存分に鍛えて欲しい。一週間といわず都合が良ければいつまででも』と」
「……」
「幸い、私はそれほど忙しくありませんし、2人ほど家族が増えたところで傾くような家でもありません。なので、私が認めるまで預かりますと答えておきました」

もう、呆然とするしかなかった。
これなら、そこらに捨てられたほうがまだマシかもしれない。
捨てられたなら最悪、サバイバルでも何でもして生きていけるが、ここでは生きていける気がしない。
一体、あの髭は何を考えてこんな馬鹿げたことをしたのか小1時間ほど問い詰めたい。

「もう少ししたら朝食です。その後は特訓するので覚悟しておいてください」

そう言って、カリーヌさんは出て行った。
どうしよう。今からでも逃げるべきか？
幸い『絶対空間把握能力』で人の気配がわかるから、見つからずに逃げることができるだろう。

「そうそう、言い忘れましたが逃げたら全力で追いかけますよ？」
「……イエス、マム」
「では、食堂に行きましょう。そうそう、今日から、ここはあなたの部屋にします。自分の部屋だと思って寛いでくださいね」

うん。逃げるとかありえねー。
逃げたところで、特訓内容に『時間無制限地獄の鬼ごっこ』が追加されて、特訓がよりきついものになるだけだ。
食堂に行くと、ジャン兄が先に座っていた。
どうもジャン兄は早く行くことを聞かされていたらしい。
その上で、俺には内緒にしていたとバラした。
2人の的にするぞ。ジャン兄！
ジャン兄は笑って、謝ったが笑い話じゃない。
これからどんな目にあうか判らないからそうやって笑ってられるんだ！

特訓の後でもそんな風に笑っていられるか見ものだ。
もっとも、俺も他人事じゃないけど……
生きてワルド家に帰れるだろうか？　そんな不安を胸に食事が始まった。

第9話『模擬戦？』

朝食を終えた後はさっそく、前に戦った中庭で実力を計るために模擬戦を始めた。
カリーヌさんは全開と違い、動きやすいようにズボンにシャツを着て、髪を後ろでまとめてポニーテールにしている。
ぱっと見て男に見え……いかんいかん。これ以上考えるな。心を読まれたらまた殺される。
戦いが始まると、ジャン兄は割りと本気で攻撃している。
実力を測るためのものだし、前に俺が戦ったのを見てるから手加減の必要はないと思ったんだろうな。
しかし、カリーヌさんは反撃せず、ジャン兄の剣と魔法を避け続けた。
体力が減り動きが鈍くなったところで、杖を突きつけられて終わった。

「その歳にしてはまぁまぁですね」

カリーヌさんに背を向けて俺の方に歩いてくる。
その表情は悔しさでいっぱいだった。
次は、俺の番か。
ぶっちゃけこの前全力出したし、むしろ、2人（ネヴァンとマーハ）もいないから、前より弱い。

「ええっと、やらなきゃダメですか？　前に戦ってからそんなに経ってないんですけど」
「やるに決まっているだろう？」

ですよねー。

て言うか、言葉使い変わってない？
あれですか。ジャン兄の模擬戦はウォーミングアップで、ココからが本番ですか？
またボロ雑巾になるのか……

「さあ、いつでも掛かって来い」
「では、参ります！」

今回はパーティーの時とは違い、武器持参（2人を除く）なので、武装錬金は使わなくてもいい。
さっきの模擬戦を見た限りだと、あくまでこっちの実力を測るのが目的であり、避けに徹し……

「『ウィンドカッター』」
「うおおお！？」

ちょっと待て！　ウェイト！　ストップ！
なんで俺の時だけ反撃が飛んで来るんだよ！？
本来なら風系統の魔法はほとんど見えないが、『絶対空間把握能力』のおかげで俺にはちゃんと見えている。

「ちょ！？まっ……」
「『風檻』『エアハンマー』」
「くっ！『エアシールド・ピラミダル』」

なにこのコンボ！
トルネードの中に封じられて、逃げ場がなくなったところで真上からエア・ハンマーを叩き込まれた。
対して俺は、面の攻撃に対して点の防御で迎え撃つ。
エアシールドを三角錐型にして俺の身を守る。

エア・ガントレットで防げなくもないが、衝撃で押しつぶされるのが関の山だ。
つまるところ、エアハンマーは空気の塊を叩きつけるものだ。
コレが鉄なら話は別だが、三角錐の頂点で空気の塊の1点を破り、衝撃を地面に流し少しでもダメージを緩和する。
おかげでダメージこそないものの、強度を上げるためにかなり精神力を使った。

「なかなか、面白い対処法だ」
「それはどうも」

褒められても、ちっとも嬉しくない。
明らかにパーティーの時より、威力が低い。
パーティーの時の威力なら、今頃シールドを抜かれて、衝撃を消しきれずに地面に埋まっている。

「ではコレの対処も見せてもらおうか。『カッタートルネード』」
「ふざけんな!?」

こちらも前より威力を抑えられたカッタートルネードだが、正直もうそんなに精神力残ってねえよ!
対処法は、あるといえばあるが精神力が足りない。
前みたく威力を削るだけで精一杯だ。

「もうどうにでもなれ!　『錬金』」

カッタートルネードに向かって突撃した。
さすがに、この行動にはカリーヌさんも驚いたようだ。
トルネードに手が触れた瞬間、無数に切り傷が出来るが、そんなのお構いなしに錬金した。

腕が切り傷だらけになったところでようやく消えた。

「マルク大丈夫か！？」

「まったく、無茶をする。手加減したとはいえ、防御の魔法を使わないと軽傷じゃすまないぞ？」

「もうだめ……」

精神力を使い果たしてその場にぶっ倒れた。

ああ、結局俺もジャン兄もカリーヌさんに触れることすら出来なかったな。

第１０話『公爵の悲劇』

「……知らない天井だ」

さすがに何回も使うネタじゃないと思うんだけど、事実知らない天井が見えるのだから仕方ない。

「おお、目が覚めたかね。早速奥様に連絡しなくては……」

俺が起きたこと確認した白衣の男は、部屋を出て行った。
どうやらカリーヌさんを呼びに行ったようだ。
どうしよう。どっかに隠れるべきか？
と、思案しながら目を閉じた。

「お怪我は大丈夫ですか？」
「ん？」

声を掛けられて目を開けると隣には、鬼ババ……もとい、カリーヌさんから生まれたとは思えないほど優しい笑みを浮かべた少女がいた。

「ええっと、確かカトレアだっけ？」
「はい」
「何でココに？」
「マルクさんが倒れたと聞いてお見舞いに来ました」

倒れたと言うか、倒されたと言うか……

「でも、お父様が驚いていましたよ。手加減されていたとは言え、

お母様のカッタートルネードを受けて軽傷ですむなんてすごいって！」

まぁ、錬金で空気中の元素をバラバラにしたから、かなり威力を殺したから。

魔力が多ければ、もっと多く錬金して無効化出来るんだろうけど、万全の状態でもさっきのカッタートルネードを無効化できるかどうか……

むしろ、あんな人を妻（カリーヌさん）に迎えて一緒に暮らしている公爵の方がすごいと思う。

「マルク様」

扉を開けて公爵家の執事が入ってきた。

「どうかしました？」

「お付のメイドと名乗る2人が玄関に着ておりますが、お知り合いでしょうか？」

「お付のメイド……もしかして黒髪と紅髪のメイドの2人組ですか？」

「はい」

間違いなくあいつらだな。

「いかが致しましょう？」

「すいません。俺から戻るように言います。玄関でしたよね。案内してもらえますか？」

「こちらです」

「それじゃ、またね。カトレア」

「はい。またあとで」

カトレアと別れ、執事に玄関まで案内してもらった。
玄関には、大勢の人だかり（主に男）が出来ており、２人の姿は見えない。

「お前達、ここで何をしている？」
「「「公爵様！　し、失礼しました。すぐに持ち場に戻ります！」」」

公爵が現れると、男達は一目散に逃げ出した。
まぁ、雇い主に仕事をサボってるところを見られれば当然の反応だよな。

「使用人たちが失礼した。どのようなご用…け…ん…で？」

後半が途切れ途切れになり、黙った。
おそらく、あの２人に見惚れてるんだろうな。
ドングもよくそうなるけど、あの２人には魅了の魔法でも掛かってるんじゃないだろうか？
大抵の男なら簡単に虜にしてしまう。なぜか俺には効果がないみたいだけど……
ところで公爵、いつまでも鼻の下を伸ばしているとカリーヌさんに殺さるよ？

「主殿を探しに来たのじゃ」「主様を探しに来ました」
「メイドのとして働きに来たのかね？」
「違います。主様がここに滞在していると聞いたのでやってまいりました」
「主とはジャン君のことかね？」
「違うのじゃ。主殿はマルク殿じゃ」

「マルク君？　彼が君達の主なのか」
「そうですわ」「そうなのじゃ」
「そうか。ううむ、勿体無い。よければ今からでもうちのメイドに、給料も子爵家とは比べ……」
「お断りしますわ」「断るのじゃ」
「そ、そうか。彼はいい使用人を持っているのだな……」
「２人とも！　どうしてここに？」

若干落ち込んでいる公爵を他所に２人に話し掛けた。

「主殿、わしらを置いて行くとは何事じゃ！」
「そうですわ。主様せめて一言あっても言いと思います！」
「いや、俺も（脱出に）置いて行くつもりはなかったんだけど、予定を前倒しして連れてこられたから……」
「むう。それではしかたがないのう」「それでは仕方がありませんわね」
「それに、招待されたのは僕とジャン兄だけだから、２人を連れてくるわけにも行かないし。ヴァリエール公爵も客人が増えると困るだろう？　そういわけで、家で待っていてくれ」
「いや、２人ほど増えても困るような家ではないし、滞在してはどうかな？　綺麗な女性が増えるのは悪いことでは……」
「綺麗な女性がなんですって？」

いつの間にか後ろに修羅がいた。
執事の顔が真っ青になり、公爵はガタガタと震えだした。

「か、カリーヌ！　これはその……」
「あなた。向こうで少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしようか。久しぶりに全力全開で訓練するのも悪くないだろう？」

やばい。修羅に加えて男言葉になってるよ！
公爵、生きて帰れるといいね。
カリーヌさんのどこにそんな力があるのか知らないが、細腕で公爵の首根っこを掴んで、中庭の方に引きずって行った。
数分後には、風の轟音と公爵の悲鳴らしき音が聞こえてきた。
今後の公爵の（命の）安全のためにも2人は帰ったことにしないとな。

「執事さん。2人を見送ってきます」

真っ青のまま硬直していた執事に声を掛けたが反応がない。

「執事さん？」
「主殿、こやつ、気絶しておるぞ」「主様、この方は気絶してますわ」

一般人に修羅（カリーヌさん）の殺気はきつかったのだろう。
かく言う俺も鳥肌が立ってるし。
執事は殺気に耐え切れず器用に立ったまま気絶していた。

「もしもーし、執事さん。生きてますか？」
「はっ！？　マルク様、失礼致しました」
「いや、気にしなくていいから。俺は2人を見送ってくるから、もう戻っていいよ」
「かしこまりました」

まだ、若干顔が青いが、そのままどこかへと立ち去った。
途中で倒れないといいが……

「で、2人とも帰る気は……」

「ないのじゃ」「ないですわ」
「ですよねー。まあ、2人がいてくれた方が心強いと言えば心強いからいいけど、この屋敷にいる間は今の姿になっちゃ駄目だぞ」

できれば、家に帰ってもらいたい。
銃の状態の時にエレオノールに見られて興味をもたれているし、パーティーの時の戦いでカリーヌさんにも銃を見られている。
無駄に勘がいいあの人のことだ。いつ感ずかれてもおかしくない。
とはいえ、秘密のを守るために人（公爵）の命を犠牲するのも忍びない。
その辺りの事情を2人に説明して納得してもらった。

「おや、さっきのメイドはどうしたんですか？」
「公爵家に迷惑を掛けるわけにもいかないので帰らせました」
「そうですか」

嘘です。2人とも銃形態になって俺の後ろ腰に下がってます。服で隠してあるから見えないと思うけど。

「ところで、後ろのそれは？」
「ああ、コレですか気にしないで下さい」

質問の答えになってないよ。カリーヌさん。
後ろのものが何か聞いたのに、正体を言わずに気にするなとか……
まぁ、聞かなくても分かるんだけどさ。
カリーヌさんが引きずってるモノ。
それは公爵……だったモノ。
全身切り傷だらけのズタボロ状態。ボロ雑巾より酷い状態だ。
あれで助かるのだろうか？
まぁ、公爵家だし水の秘薬や優秀な水のメイジが居るんだろう。

「私はコレの治療と2回戦があるので失礼します」

どうやら治療して、もう1戦やるようです。
これはむしろ、秘薬やメイジが居ない方がいいのでは？
そうすれば傷は治らないが、新たな傷と痛みを受けることはないだろうし。
すると、さっきのカリーヌさんの言葉が聞こえたのか、公爵が震えだした。
そして俺の顔をすがるような目で見た。

「（マルク君！　助けてくれ！　このままでは本当に死ぬ！）」
「（無理です。僕まで巻き込まれます）」
「（そこを何とか頼む！）」
「（だから無理です。それに、パーティーのとき、僕を見捨てましたよね？）」
「（そ、そうだったかな？）」
「（そうです）」
「（だが、今回の原因は君のお付のメイドが……）」
「（鼻を伸ばした上、メイドとして勧誘していたのは公爵でしょう？）」
「（うっ）」
「（自業自得です。大丈夫。冥福を祈っておきますから）」
「（それじゃあ、私は死亡確定じゃないか！）」
「（そこは公爵の頑張り次第です。でわ）」
「（ま、待ってくれ～～～）」

と言う男同士の心の会話（アイコンタクト）を終えた。
同情はするし、哀れみもするが、巻き込まれるのはゴメンだ。

「そうそう、今日は忙しいので特訓はまた後日にします。よく体を休めておきなさい」
「わかりました」
「では、また夕飯の時にでも」
「はい」

最後まで助けを求めるように見ていた公爵をあっさり見捨てて、俺は自分の部屋に戻った。
その後、夕飯までに間隔を空けて何度も悲鳴が響き渡った。
なお、夕飯の時に、公爵の姿がなかったので生きているか本気で心配になった。

第１１話『特訓特訓また特訓』

公爵殺人未遂事件から1週間が経過した。
初日のように実力を見る模擬戦はせず、ふつうに魔法の練習を始めた。
フライで高速移動させられて吐いたり、ひたすら魔法をエアシールドでガードしたり、カリーヌさんと地獄の鬼ごっこしたり、カリーヌさんのカッタートルネードをくらったり……
あれ？　後半は特訓じゃなくて拷問じゃね？
ジャン兄はと言えば、本人希望で精神力を上げつつ新規攻撃魔法の練習。
いいな。楽そうで。俺もそうすればよかったな。

「よそ見しない！『ウインドカッター』」
「『エアシールド！』」

最近はフライで鬼ごっこしつつ、カリーヌさんの攻撃に耐える訓練をしています。
言うだけなら簡単だけど、これかなりきつい。
フライで飛んでいる間は、他の魔法に集中力を割けない。
迂闊に割くと、フライが切れて地面に真逆さま（まっさかさま）だ。
初めのうちは高度を上げて、地面に落ちる前にフライを唱えなおした。
失敗したらヒモなしバンジーだ。
何回か墜落しそうになりカリーヌさんにレビテーションで助けられたこともあった。

「『エアハンマー』」

今度はエアハンマーが飛んできた。
俺は慌てずにフライに集中して回避行動を取った。
エアシールドでダメージ自体は防げるが、衝撃で崩し下手をするとそのまま地面に落とされる。
避けた方がいい魔法と防いだ方がいい魔法を織り交ぜて攻撃してくるからエロい（いやらしい）。
ちなみに、捕まったり墜落して助けられたら、特訓の終わりにカリーヌさんとの模擬戦が待っている。
おかげで、用意してもらった自室で寝られません。目が覚めると、医務室で寝ている。
もう、主治医の白衣さんとは友達だよ！　一部の水の魔法もスペルだけなら完璧だ。
……嬉しくない。

「あと5分で終わりにします」

よし、今日は模擬戦をせずにすみ……

「全力で逃げなさい。『カッタートルネード』」
「ぎゃあああああ」

カリーヌさんお得意のカッタートルネードが俺に向かって飛んでくる。
最近は、かなり手加減されたカッタートルネードなら錬金で気体を変質させて分解できるようになった。
けど、それはかなり手加減してもらったときの話。
今のカッタートルネードは手加減してもらってるときの2倍のサイズ。
錬金とか無理！
カッタートルネードを振り切ろうとフライのスピードを上げた。

直線なら振り切れないことも……

「敵が一人とは限らないぞ！」

マルク　は　カッタートルネード　から　逃げ出した。
カリーヌ　に　先回りされた。

このままだとカリーヌさんに突っ込むことになる。
振り切るためにかなり速度を上げたから、回避もできない。

「『ヘビーウェイト』」

フライを解除して、さらに身体を重くする魔法を自分に掛けた。
これで自由落下にしたがって落ちる。
無理やり軌道を変えて、地面が迫ったところでフライをかけ直す。
もうヒモなしバンジーにも慣れたよ！　散々体験したからな。

「今日は模擬戦せずにす……」
「はい。おわり」

避けたはずのカリーヌさんが目の前に居た。
急なことで、止まることも回避することも出来ずに捕まった。

「……」
「まだまだですね。自分と同じ戦い方をしないとでも？」

目の前にはカリーヌさん。さっきまで直撃コールに居たのもカリーヌさん。
直撃コースにいたカリーヌさんを見ると、姿がぼやけて消えた。

「幻影ですか……」
「ええ」

やられた。
俺の動きは読まれていた。
直撃コースに幻影を置いて、その回避軌道に待機して待ち伏せ。
今日こそは模擬戦なしで済むと思ったのに……

「さて、それでは模擬戦を始めましょうか」

今日も医務室のベットと白衣さんのお世話になりそうだ。
そう思いながら、模擬戦を開始した。

———その晩

そんなきつい生活の裏でも2人の練習はかかさない。
さすがに公爵家の敷地内だとばれる可能性があるので、毎晩抜け出している。
外出がばれない様に布団を丸めてその上から幻影をかけて置いてきた。
これで俺が寝ているように見えるし、丸めた布団だけど実体があるので布団が膨らんで、そこで寝ているように見える。
幻影だけだと、布団をすり抜けるからな。
白衣さんには、ボロボロでぐっすり休んでいるから邪魔しないで欲しいと言ってある。
実際、慣れるまでの数日は本当にぐっすりだったから、あっさりO

Kしてもらえた。
朝までに戻らなきゃいけないから、ぶっ倒れるまで撃つわけにはいかないが、それでもフラフラになるまで撃ち続けている。
最近は、射撃訓練から魔法訓練に移っている。
錬金で作った的を使っていない方に投げてもらい、それを撃つ。

「ネヴァン。3枚」
「了解じゃ」

マーハの指示で的を星空に投げた。どれも適当に投げているので、高さ・方向・速さなどバラバラだ。

「主様。使用系統。火・水・水」

俺もマーハの指示に従って、決められた系統の魔法で的を撃つ。
今回は火1つに水2つ。
「『ファイアーボール』『ジャベリン』『ジャベリン』」

的に向かって、魔法を撃っていく。
厄介なのは、的にも種類があり、ガラスのように簡単に割れるものから鉄製の硬い物まである。
それに応じて当てる魔法も考えなくてはいけない。
的を確認し、指示された系統の中から最良の系統を選び当てる。
時々、的を壊すのに有効な系統がないときがあり、その場合はその的だけスルーする。
そんな訓練を毎晩毎晩繰り返した。

「マーハばかりずるいのじゃ！　たまにはワシも使うのじゃ！」

と的の投げ役をしているネヴァンが怒った。

ネヴァンは実弾しか扱えないから、公爵家に来て以来訓練はご無沙汰だった。

「わかった。じゃあ、明日はネヴァンの実弾訓練にしよう」
「さすが主殿。話がわかるのじゃ！」
「むー」
「マーハもむくれない。こっちに来てからマーハよりで訓練してただろ？　たまにはネヴァンに譲ろう。向こうに帰ったらまた1日おきに交代で練習するから」
「主様がそういうのであれば……」
「よし、ではもう今夜は切り上げるのじゃ！　疲れを残しては明日の練習に支障がでるからのう」
「まだ早いわよ！　あと10回はするわよ」
「いや、そんなにやったら屋敷に戻る分の精神力がなくなるから！」
「そうじゃ。そんなにやっては明日の練習に支障が出るじゃろうが」
「大丈夫よ。倒れても私が運んであげるから！」

練習に支障が出ることについては否定しないのか……
何とか回数を半分に減らしてもらい。ノルマをこなして公爵家に戻った。

———次の晩

ネヴァンとの約束どおり、今夜はネヴァンの練習を始めた。
ネヴァンで練習するときは目隠しをして行う。こうして真っ暗な視界を見ると、前世を思い出す。

何も見えず、音と匂い、そして『絶対空間把握能力』が便りだった。
今でこそ目が見えるが、それでも見えないものがある。いや、見えるからこそ見えないものがある。
正面には木が1本立っている。
その裏に的が置いてある。今の位置からでは例え目が見えても見えない。
でも、俺には絶対空間把握で視えている。
その場から移動せずネヴァンを構える。
銃声はサイレントで消してあるので、夜でも遠慮なく撃てる。
このままでは当たらない。
当たるように軌道を想像する。
弾道をどう曲げれば木の裏の的に当たるのか？
弾道の曲がりを最小限に、それでいて的に当たるように。
引き金を引いて木から外れた方を撃つ。
俺は曲がれ曲がれと念じた。すると、弾丸はおかしな曲がり方をして木の裏の的を貫いた。

「はぁはぁはぁ……」
「主殿、集中しすぎじゃ。弾道は良いがもっと気軽に行えるようにならんと使い物にならぬぞ」
「そうは言っても疲れるんだよ。もっと遅いものならいいけど、弾丸は早すぎる」

曲射。
ネヴァンが使える発射方法の1つだ。
本人曰く、その気になれば弾丸の完全操作も出来るらしいが、今の俺では1度だけ方向を変えることしか出来ない。
弾丸の操作はかなりの精神力を使う。ネヴァンが仲介しているとはいえ、1度曲げるだけでかなりきつい。
風系統の魔法にも、操作はあるけど精神力の消費は曲射よりもずっ

と少ない。
まぁ、操作では弾丸を操作するなんて不可能だろうけど……
「弾道のイメージは悪くない。修正する動きも最小限じゃ。あとはどれだけその手順を集中せずに行えるようになるかじゃ。というわけで訓練あるのみ！　マーハ、次の的」
「もう主様はフラフラよ。これでおしまいに決まってるでしょ！」
「なんじゃとう！　あと１０回はやるぞ」
「それは……ぜぃぜぃ……無理……」
そんなにやったら精神力枯渇どころか、精神的に死ぬわ！
なに！　俺を廃人にしたいのか！？
「むう、仕方ないのう。では後２回で終わりにしようかのう。その代わり、２、３日後にまたワシの訓練じゃからな」
その後、同じ事を２回繰り返した。
え、その後？
もちろん精神力の枯渇でぶっ倒れたよ。
その日は２人に担がれて公爵家に戻った。

———さらに次の晩
今晩はネヴァン先生とマーハ先生の下で、ロストマジックの練習をしている。
ロストマジックと言うのは、長い歴史の中で禁呪指定され魔法の存

在（呪文や効果）ごと闇に葬られた魔法や用途がなく後世に語り継がれなかった魔法の総称。
ロストマジックは、系統魔法だけでなくコモンマジックもあるという。
失われた魔法と言うなら、伝説の系統『虚無』も入るのではないかと聞いたが、虚無は各国にブリミルの遺産とともに受け継がれているから違うと言われた。
しかし、この世に使える者が居ないと言う点では、ロストマジックと変わらないと思う。
俺は2人が知っているロストマジックを教えてもらった。
もっとも、2人が使える訳ではないので、呪文と効果を説明してもらって、イメージしながら練習している。
今のところ使えるようになたのは4つ

ディテクトマジックの上位版で先住魔法の魔力するら感知する『センス・マジック』
あらかじめ魔法をかけた対象の位置を知ることが出来る『マーキング』
あらかじめ魔法をかけた対象を手元に呼び寄せる『アポート』
ライトの上位版『レイ』

教えてもらった魔法を含め、2人が知っていたロストマジックはすべてコモンマジックだった。
2人が知っているコモンマジックはあと3つあり、今は魔法の効果を知ることが出来る『アナライズ・エンチャント』の練習をしている。
魔法の効果が判ると言われたけど、いまいちイメージできない。
ファイヤーボールとか見ただけで判ると思うんだけど……
俺的にはそんな魔法よりも、別の魔法が知りたい。

無英物を透視する禁呪指定のロストマジック『シースルー』

コレがあれば世界中すべての男の夢が叶うと思う。
むしろ、なぜこのコモンマジックが失われたのか不思議だ。
禁呪されようが、使える魔法は裏でひっそりと語り継がれるものだ。
前世で目が見えなかったとは言え、それなりに女性の裸に興味はあった。
こっちでは女性は女性でも、母さんや長年の世話係りの人の裸など、見慣れたと言うと失礼だがあまり意識はしなかった。
ていうか、家族に欲情したらまずいだろう。
2人に知っている呪文と効果を聞いたときに、シースルーを一番に知りたいと言ったらかなり怒られた。
そりゃそうか。
禁呪指定云々の前に、見知らぬ女性として裸を見られるのは問題だよな。
俺が悪かったと反……ちょっと、2人とも。なんで、メイド服を脱ごうとしてるのかな？
え？　シースルー覚えなくても言ってくれれば脱ぐって？
脱がなくていい！　脱がなくていいから！
確かに、見た言っちゃ見たいけど、それだけのためにシースルーを覚えるわけじゃないから。
透視とか出来たら色々便利だし、使い道は覗き以外にもあるだろ！
そんなこんなで特訓続きの毎日は過ぎていった。

……言っておくけど、2人の裸は見てないぞ？　ちゃんと止めたからな！
不意に「このヘタレ！」とドングの幻聴が聞こえた気がした。

第１１話『特訓特訓また特訓』（後書き）

今回登場した作者オリジナルの魔法分野『ロストマジック』
これは、悪用されると非常に困る。または使い道がないなどの理由で廃れた魔法分野です。
前者はロマリアの教会が禁呪指定していて、もし使えば異端審問なしで即罰せられるほどの罪です。
主人公達は知りませんが、禁呪はロアリアに保管されている禁書に残っています。
ですが、使うものが居ないと言う意味では、後者と同じです。
虚無も各国の宝として残っていますが、禁書は存在しないものとして扱われているため、歴代の教皇しか知りません。
そのため、廃れた魔法と合わせて『ロストマジック』と呼ばれます。
世間一般には、虚無と同様に存在すら怪しい魔法として認識されています。

今後、あとがきではロストマジックやオリジナル魔法の紹介をしていこうと思います。
ここ（あとがき）で書くのは、物語の中で書くと、説明的になりすぎたり話の流れを壊してしまう可能性があるからです。（まぁ、作者が文章下手なのもありますが……）

今回は、軽くさわり程度で済ませました。次回からは魔法の紹介に入りたいと思います。
作中で、わからず納得いかない思いをした方も居るでしょうが、作者の文才のなさを地に伏してお詫び申し上げます。
なお、勢いだけで書いたものなので、指摘されて初めて気付くこともあるので、そういった点もあとがきで書かせていただきます。
今回のコレもとある読者様からの感想で作りました。言われてみれ

ば納得です。
後付の理由になりますが、納得していただけるよう努力します。
では、次回までごきげんよう。

第１２話『特訓の次は実戦だ』

そんな生活を休まず続けて一ヶ月。
当初の予定だった一週間は本当に無視され、今日は卒業試験を受けることになった。
この試験に合格すれば家に帰してもらえるらしい。
なんとしても受かって帰るぞ！
それにしても、どんな試験をするんだろうか？
前日の晩に万全の準備をするように言われたが……
今の俺は、公爵家の備品である革の鎧（というか胸当て）を着て、愛用のセスタスとスパイクブーツを装備している。
発動体の指輪もつけている。
２人もばれないように服で隠し、後腰に下げている。
今出来る万全の装備だ。
ジャン兄は普段と変わらない格好だ。

「マルク、なんだその格好は？　メイジというより戦士だな」
「ジャン兄と違って、遠距離からの攻撃は苦手だから。接近戦をするなら、それなりに守りも考えないとね」
「たしかに、メイジは近づかれたら脆いが、お前は逆だからな。むしろ離れられると苦戦するだろう？」
「そのとおり」
「それにしても、一体何をするんだろうな？　マルクは何か聞いているか？」
「いや、さっぱり。ただ万全の準備をしろって言ってたし、用心するに越したことはないと思う。カリーヌさんなら、２人でドラゴン倒して来い。って言っても不思議じゃない」

最も、本当にそう言われたら、革鎧がどれほどの役に立つのか疑問だが。

「……ドラゴンはないだろうが、私も防具くらいつけてくるべきだったな」

「いくら私でも、あなた達をドラゴンの前に連れて行くことは、まだ（・・）しませんよ」

ジャン兄と話していると、予定の時間になったのかカリーヌさんが来た。

ていうか、この人まだ（・・）って言ったよな？

それってそのうち連れて行くって事ですか？　もしそうなら、家に帰った後は全力で交流を拒否するぞ！

ドラゴンとか単独で相手にするものじゃないないだろ。

カリーヌさん程の化け物ならともかく、この国にそんなマネが出来る人が何人いるか……

「さて、昨日も話したとおり。今日はあなた達の卒業試験を行います」

「「はい」」

「試験内容は、一人でオークを倒すこと。手段は問いません」

なにその俺に超不利な試験は……

ジャン兄なら遠距離で強力な攻撃魔法を当てれば終わりだろうけど、俺じゃあ殴るしないぞ？

２人使えば一発だろうけど、どうやって勝ったのか聞かれたり、見られたらアウトだ。

おそらく、この試験の本当の目的は、殺しを経験させることだろう。

いきなり人間相手はショックが大きい。から亜人なんだろうが、生き物を殺すことに変わりはない。

いくら害ある存在であったとしても、相手は人間を想起させる生き物だ。
コレが虫ならさほどショックもなく殺せるだろう。動物だったらどうだ？
亜人ほどではないが、ショックは受けるだろう。
だが、これからこの世界で平民以外で生きていくなら、コレは避けては通れない道だ。
メイジも傭兵も兵士も、自分に危機が迫れば相手を殺す。
それが出来ないのは、手段を持たない平民だけだ。その平民でさえも、生きるために動物を狩る。
前世の世界では考えられないことだ。
動物を殺すのは専門の業者が居たし、人を直接殺すのは犯罪者くらいだった。

「……く。聞いていますか？　マルク」

考え事に集中していたせいで、すっかり話を聞き逃した。

「すいません。聞いてませんでした」
「聞き逃さないように気をつけなさい。戦場では何度も聞き直す余裕などありませんよ」
「はい」
「もう一度だけいいます。この屋敷から2日ほど離れた村にオークが出たとの報告がありました」
「その村に出たオークを狩るんですか？」
「半分正解です。オークは確認されているだけで１０匹。おそらく森に居る分も含めると倍以上居るでしょう。私は我が家の兵士を連れて、村の警護に当たります。周辺の地形や詳しい情報を聞いたのち、後日殲滅します。あなたたちはそれまでに一人１体狩りなさい」
「わかりました」

リミットは到着して1日か。のんびり周りを調べたり罠をしかける暇はなさそうだな。

「逃げても構いませんが、村まで連れてこないように。連れてきたら、その分だけ狩る量を増やします。今回失敗すれば、次に引き継ぎます」

逃げ帰るならきっちり撤いてから帰って来いってことですね。

「それでは出発します」

カリーヌさんはマンティコアに乗り、俺とジャン兄は馬、私兵も一部は馬に乗って件の町に向かった。

第１２話『特訓の次は実戦だ』（後書き）

前回のあとがきで書いたとおり、魔法の説明をします。
今回はロストマジックです。

魔法名：センス・マジック
分類：コモンマジック　ロストマジック
効果：ディテクトマジックの上位版で先住魔法の魔力を感知する事ができる。

備考：センス・マジックは使い道がなく廃れた魔法の１つである。
先住魔法の魔力さえ感知できるという、対エルフに効果的な魔法だが、その使用頻度の低さから使い手が減った。または、習得しているが使われない魔法である。
先住魔法の魔力が感知できると言っても、あくまで物に対してのみであり、戦場で使うには適さない魔法とされている。
さらにエルフの品は、まずハルケギニアには流通しない。
使い道として、対象（もの）にエルフの先住魔法が掛かっているかどうかどうかわかる程度。
貴族の間では、戦闘にはまるで役に立たない魔法とされている。
それゆえ、知っている者も使わないし、役に立たない魔法として教える者が居なかった。
そのため、徐々に歴史の闇に埋もれた魔法だ。

作者の考え
コモンマジックのほとんどが、使えれば便利だが戦闘には役に立たない（とされている）魔法です。
ハルケギニアのメイジは使わない魔法よりも、戦闘で使える魔法を重視するし。

普段使うなら、『ディテクトマジック』で十分なため、広まらずに廃れた。
もしくは、広まっていないだけで、今でも知っている人は知っているマイナーな魔法です。

作中ではネヴァンとマーハがロストマジックと呼んでいるのは、主人公が知らないからです。
主人公は家の書庫の本を読み倒しているので、少なくともコモンマジックで知らない物はありません。
そんな主人公が知らない魔法をロストマジックを呼びます。
なので、実際には廃れておらず、使わないだけの魔法もあります。
センスマジックはその典型です。

簡単に言うと、コレといった明確なないのでわざわざ教えようとは思わないコモンマジックです。
先住魔法を感知しなくていいならディテクト・マジックの方が、はるかに簡単だからです。

第13話『実戦（前編）』

今日、ようやくオークの姿が見つかったと言う村に到着した。
村長らしき人とカリーヌさんが何か話をしている。
おそらく、今日泊まる場所の話だろう。
カリーヌさんの倍以上年老いた老人が額に汗を滲ませながら話していた。
おそらく平民なんだろう。そりゃ公爵家なんて大貴族相手に話をするとなれば冷や汗くらいかくだろう。
しばらくして、話がついたのか村の外に案内された。

「カリーヌさん、何処に行くんですか？」
「今晩寝泊りする天幕を張ります。村には宿のような宿泊場所はないそうよ。さすがに住民を追い出して家を借りるわけにも行かないわ」

納得。確かにこの村は街道から少し外れている。
街道から外れると言うことは、人通りが少ないことを意味する。逆に街道と街道の交わるような場所は人の行き来が多く、必然的に街の規模も大きくなり、宿泊施設も充実する。
自分で寝泊りする天幕は自分で貼るように言われた。
俺とジャン兄で1つの天幕を借りて張った。
ジャン兄は貼っている間、そわそわしていた。
天幕を張っていなければ今すぐにでもオークが居る森に飛んでいきそうだ。

「ジャン兄、落ち着けよ。そんなに焦ると足元すくわれるぞ？」
「だがな。初めての実践だぞ？　お前やカリーヌ様と戦ってそれなりの力はあるつもりだ。それをようやく振るえると思うとついな。

それに相手はたかがオークだぞ？　何を恐れる必要がある」

ダメだこりゃ。
完全に冷静さを欠いてるよ。
オークは集団行動をする亜人だ。村を襲うときや休むときも集団で行う。
群れを離れることは、水を飲みに言ったりするなど、個人的な事情を除いてまずないと本に書いてあった。
すべてを信じるわけではないけど、集団行動をすると言うことは、どの本にも書いてあった。
下手に手を出そうもなら1・2体倒したところで逆襲されるのがオチだ。
その上、俺達はこの辺りの地理を把握してない。もし見つかれば逃げるのはきついだろう。
予想通り、天幕を張り終わると意気揚々とジャン兄は森に入って行った。
その後ろをもう1人のカリーヌさんが追いかけていった。おそらく監視　兼　いざという時の護衛だろう。
俺は、天幕を張るように指示していたカリーヌさんに村に行ってくると言って、その場を離れた。
この辺りの地理に詳しそうな人やオークのことについて少しでも情報がほしい。
さっきカリーヌさんと話していた老人、推定村長なら何か知っているか、最低でも地理に詳しい人位は紹介してもらえるだろう。

村の中で適当な人に聞き込みをしながら情報を収集していく。
その中で判ったことは
1：オーク鬼が現れ始めたのは、今月の始め頃（俺がパーティーに参加した頃）
2：数は少なく見積もっても20はいる。（森に入った狩人の目視

情報）
３：東の洞窟を根城にして、徐々に村の方へ縄張りを広げていっている感じ。（場所も教えてくれたが、俺には地理情報がないので曖昧）
４：オーク鬼が出たせいで、動物や山菜が取れず困っている
とあまり戦いに使えそうな情報はなかったが、大体の生息地がわかったのは大きい。
何も知らずに洞窟に逃げ込んだら、冬眠中の熊に会うよりも酷い目に会いそうだ。

さっきカリーヌさんと話していた老人は、予想通り村長だった。
村長が見せてくれた地図を見ながら、洞窟の場所を教えてくれた狩人の情報を村長に確認する。
村長も同じような報告を受けていて、洞窟の場所と周辺の地形を詳しく聞いた。
時間をかけるなら罠を張るなり、単独行動したオークを狙うなり出来るが、期限は明日の朝。
のんびりしていれば時間切れだ。
ん？　待てよ。オークたちは洞窟で寝てるんだよな。
それならあの手が使えるか。
作戦を思いついた俺は、野営地に戻ってカリーヌさんに森に入ることを伝えた。
おそらく、ジャン兄の時同様、監視をつけるだろうから２人は使えない。
本当に危険になったらそうも言ってられないけど……
村で聞いた情報を元に東の洞窟に向かった。
匂いで気付かれないように、風向きを警戒しながら洞窟を探した。
もしも見つかったら全力で逃げだ。
単独行動している奴かもしれないけど、集団の可能性のほうが高い。
欲を出して留まったら、集団で逃げ切れないじゃすまないからな。

他人が見たら臆病者と笑うかも知れないが、それなら初めてで同じことをやってみろと言いたい。
長年やっていれば経験で判るのかもしれないが、俺にはそれがない。
始めの一歩は慎重であればあるほどいい。もちろん、試験に受かることを前提にした話だが。
試験云々がないなら、今頃そんな危険なことを一人で出来るか！と言って逃げ出しているところだ。
経験を積ませたいなら、一人でなく集団で戦いの雰囲気にされさせた方がいい。
料理だって、いきなりやらせたりはしない。まず出来る人が監視しながら……って、出来る人が監視してるな。
話が逸れた。けど、ようは俺の領域で戦えばいいって話だ。
わざわざオークに有利な条件で戦う必要はない。

「見つけた！」

森に囲まれた岩山にぽっかりと開いた洞窟。
洞窟の前には、棍棒のような太い木を持ったオークが2～3匹うろついている。
今のところ、俺に気付いた様子はない。
洞窟の中までは明かりが届かないのではっきりとは判らないが、気配からして10匹前後といったところだろう。
どうする……今からでも作戦は実行できる。けど、洞窟前のオークが邪魔だ。
と考えた時、オークの1体がその場から吹っ飛んだ。

「なんだ！？」

思わず、叫びそうになるのをこらえ、再度周りの気配を探る。すると、斜め右の方によく知っている気配があった。ジャン兄だ。

おそらく、エア・ハンマー辺りを放ったのだろう。
しかし、殺すには至っていない。
「衝撃系の魔法を使うなら上から地面に叩き付けた方が衝撃を減らしづらい」

これは散々カリーヌさんに言われたっていうのに……
近くにいたオークは周りを警戒し、エア・ハンマーで吹き飛ばされたオークも起き上がった。
おまけに外の騒ぎを聞きつけたのか、洞窟の中からも5体出てきた。
ジャン兄は……すでに逃げたな。俺も、警戒状態のオークに仕掛ける気はないし、ばれる前にその場を立ち去った。
作戦を実行するなら、オーク達が寝静まった夜が狙い目だ。
奴らは夜目が利かないが、俺なら気配でわかる。
その前に、ジャン兄に釘をさしておかないといけないな。
もし作戦を決行する時に、さっきみたいな真似をされたら支障をきたすし、最悪俺もジャン兄も巻き込まれかねない。
洞窟からかなり距離を取り、ジャン兄の気配を探しながら森を歩いた。
しばらくして、川のそばで座り込んでいるジャン兄を見つけた。

「ジャン兄」
「！」

俺が声を掛けるとビクッと反応した。
もしも、声を掛けずに近寄ったら魔法が飛んできたかもしれないな。
そのまま、無言でジャン兄の隣に座って川を眺めた。

「ジャン兄は試験の方はどう？　倒せた？」
「いや、まだだ。さっきオークを見つけて魔法を当てたけど殺しき

れなかった。近くの洞窟からオークが何匹も出てきたんだ」
「知ってる。見てたから」
「そうか……　お前の方は？」
「まだ。ちょっとした作戦はあるんだけどね。あの洞窟前のオークが邪魔だから先送りにした」
「もしかして邪魔したか？」
「いや、今回はしてないよ。でも、作戦を実行するときにはあんなことはしないで欲しいな。もっとも、洞窟前にオークが居たら出来ないんだけど」
「ならよかった。自分のことさえ出来ず、あげくお前の作戦まで邪魔していたら最悪だ」
「あそこで、ジャン兄が3匹をかっこよく倒してくれたら、すぐに行動できたん……　ジャン兄、戦闘準備」
「なに？」
「良いから早く！」

立ち上がって、拳を構えた。
ジャン兄もなにがなんだかわからないまま、俺の行動に引きずられるように杖剣に手をかけた。
振り返ると、茂みが揺れその奥からオークが姿を現した。

「ＧＡＡＡＡＡＡ！！！」

手に持った棍棒を振りかぶり、俺とジャン兄目掛け振り下ろした。
俺は右に、ジャン兄は左に飛んで回避した。
ドングの拳に比べたら段違いに遅い。威力はオークの方が上だが、当たらなければ威力が高かろうがどうということはない！
気配感知を広域で行って確認したが、このオーク以外に亜人の気配はない。
おそらく、水を飲むために単独行動したのだろう、はっきり言って

カモだ。
問題は、俺とジャン兄のどっちがこのオークを狩るかということだ。
このオークを狩れば、カリーヌさんの試験は合格。
俺も作戦は立てたが、一対一の方が楽だ。

「ジャン兄、どうする？」

聞いたときには遅かった。ジャン兄はウインドスピアをオークの頭に打ち込んだ。
かなり精神力をつぎ込んだのだろう。オークの顔面に穴が開いた。
断末魔さえあげることもなく、オークは倒れた。

「これで、俺は試験クリアだ。お前は何か作戦があるんだから譲ってもらっても良いよな？」

いや、それとコレとは話が別だ。
と言いたかったが、手柄を譲るなど無理だ。
オークを倒したのはジャン兄だし、おそらく護衛に着いているカリーヌさんも見ている。
それに、喜んでいるジャン兄に水を差すのも悪い。
本当は、ものすごく文句を言いたいけど、今日のところは一言で我慢する。

「貸し1だからね」

たぶん、その時の俺の声はものすごく不機嫌だったと思う。

第１４話『実戦（あっさりめの後編）』

ジャン兄がオークを殺して数時間が経った。
もうすっかり夜になった。
あと６時間もすれば、夜が明ける。そうなれば俺の試験は失敗。
焦るな。命は大事だが、失敗の後に待っている特訓でも命を落としかねない。
大丈夫、成功する。
今、目の前には昼間の洞窟がある。周りに居たオークはどこかに行っているか、洞窟の中で眠っているか。
洞窟からは寝息といびき、オーク特有の獣臭い匂いが漂ってくる。
真っ暗な闇の中、月の光が広場を照らす。

「落ち着け、大丈夫俺ならやれる」

はやる気持ちを落ち着かせながら計画を実行する。
まずは……

「錬金」

洞窟の入り口に鉄の壁を作り、入り口を塞ぐ。
塞ぐといっても、オークが出られない程度の隙間は空いている。
そこから中を見ながら天井に錬金をかけて、プラスチック粉にする。
細かい粉が天井から降り注ぐ。

「あと一息だ！」

今のところオークが気付いた様子はない。
後１手だ。

鉄の壁から離れて、ファイアボールの最大射程まで距離を取った。
「これで終わりだ。ファイアボール！」
洞窟と鉄の壁の間に向かってファイアボールを打ち込んだ。
次の瞬間、洞窟内で大爆発を起こした。
いわゆる粉塵爆発という奴だ。
洞窟のような密閉空間で、天井をプラスチック粉に練成し自然落下させる。
ただ、粉は俺が出来る限り細かく錬金した。
自然落下でも、かなりの時間空気中を舞い続ける。そこにファイアボールで着火した。
ついでに被害が大きくなり、こっちに被害が来ないように鉄の壁で入り口を塞いだ。
火が得意なメイジならともかく、俺程度のファイアーボールじゃ、火傷を負わせるのが精一杯だ。
それどころか、２人の力を借りない俺単体の魔法では、１体でも不意打ちして勝てるかどうかってレベルだ。
どうしようもなかったら、なんとかして１体だけおびき出すつもりだった。
けど、運良く地形が俺に合っていた。洞窟という密閉空間に固まっている。
この作戦は、村で情報を聞いた時に思いついた。
「うまくいったか？」
発射地点からさらに離れた風下で洞窟を眺めている。
『絶対空間把握能力』で調べる限り、生物の反応はない。

第15話『実戦2（そんなにあっさり終わるわけないじゃない！）』

絶対にオークを1体以上殺しているが、俺もこっそり付いて来ているカリーヌさんも実際に死体を見ていない。
それに、カリーヌさんが見ていたとしても、彼女は本来この場に居ないはずの存在だ。
だから倒したことを証明するために、物的証拠が要る。
警戒しながら洞窟に近づくと、中から肉のこげた嫌な匂いが漂ってくる。
思わず、吐きそうになった。

「そうだよな。俺はこの手でこいつらを殺したんだ」

平民が貴族を、魔法を恐れる理由がよくわかった。
もし、これを自分に向けられたらと思うとぞっとする。
模擬戦なら、どうしても殺されないだろうという安心感が、心のどこかにあったのだろう。
けれど、実戦は違う。いつこうなってもおかしくない。
顔をしかめながら、『ライト』で灯りを確保して、オークの死体を見ていく。
入り口付近は、どれも炭化していて触れるだけで崩れそうだ。
奥に行くにつれて、だいぶマシな死体がある。その中の1つから首を切り頭を取った。
これならオークを殺した証拠になるだろう。
証拠さえ取れば、こんな場所に長居は無用だ。さっさと村に戻ろう。
ここ居るオークが全部じゃない可能性だって……

「！？」

巣窟の外に知らない気配を感知した。
それはすぐに洞窟の中に入り、走って俺の方に向かってくる。
まずい。隠れないと！
『ライト』を消して、岩のくぼみに体を押し込んで出来る限り身を隠した。

ドスドスと足音が聞こえる。
その足音が俺の隠れている岩場のすぐ近くで止まった。
よく考えれば、オークなら匂いでばれるじゃないか！
しかし、夜目が利かないオークなら、不意打ちのチャンスがある。
今の内に仕掛けるべきか？
そう思ったとき、重厚な声が聞こえた。

「貴様、何者ダ！」
「！」

その声は明らかに俺の隠れている岩場に向かって話掛けられている。
オークのようなしゃがれ雄たけびではなく、人の話す言葉。
と言うことは人間？
いやありえない。
すぐ近くから漂ってくる気配は人間のそれとは全く違う。

「コナイナラ、コチラカライクゾ！」

背中が凍りつくかと思うほどの悪寒が走り抜けた。
カリーヌさんと戦った時でさえ、これ程の悪寒は感じなかった。
咄嗟に岩場から飛び出して、『ライト』を唱えた。
もう相手に俺の存在はばれている。
相手が何者かは分からないし、相手も俺が何者か分からないはずだ。

俺は明かりをつけて確かめた。もしも、俺の気配察知が間違っていて人間だったら、争いは避けられるはずだ。
しかし、その願いはあっさりと裏切られた。
明かりで映し出されたのは、オークの顔を引き締め厳しくした亜人の顔。それだけならまだよかった。
その下には、３ｍを超える巨体に岩のような硬質の赤黒い肌、そして引き締まった筋肉質の体。
そして、無骨で刃のない剣のような分厚い塊を片手で持っていた。
俺自身も鍛えているからこそ分かる。身体能力が桁違いだ。

「貴様ガ、コレヲヤッタノカ？」
「……」

一番聞かれたくない台詞を聞いてきた。
もしも、というか十中八九オークの関係者だろう。
ここでＹＥＳと答えれば、仇討ちとこの場で殺される。かといって、違うと答えれば、なぜここに居るのかという話になるだろう。
それを切り抜けられる言い訳がぽっとでてくる訳がない。
しかし、黙っていればさっき岩場に隠れていた時のように問答無用で殺される。
長考した末に口から出たのは……

「そうだ。これは俺がやった」

正直に答えた。
わずかでも可能性がある方に賭けた。
その結果は……

第１６話『実戦２（今度こそ終了）』

亜人は顔を歪ませて笑った。

「ソウカ。コレホドノ力ヲ持ツ人族がイルトハ」

オークを殺したことに怒るでもなく、興味を失って去るでもなく、ただ笑っていた。

しかし、隙がない。

今の返答で少しでも隙が出来ればと思ったけど、望み薄だ。

「相手ニ取ッテ不足ハナイ。サァ、死合オウゾ」

「ちょっと待て！　言葉が通じるなら話を聞いてくれ。俺に敵対の意志はない」

「戦エ。サモナクバ死ネ」

「っ！」

飛びのくと、俺がさっきまでいた場所に大剣が突き刺さっていた。

「フム、イイ動キダ」

そう言って大剣を構える亜人。

話し合いは無理。

出口方面には亜人がいるから逃げるのは無理。

戦うしかないか……

腰に下げているネヴァンとマーハを構えた。

「ヤル気ニナッタカ！　サア存分ニ死合オウゾ！」

「絶対に生き残る！」

「ナラバ俺ニ打チ勝テ！　人族ノ勇士ヨ」

亜人は狭い洞窟で大剣を大上段に持ち、俺に振り落とした。
後ろに飛びのいてそれを避ける。
大剣は天井に当たってもお構いなしに振り下ろされた。
普通なら天井の岩に当たった時点で弾かれるなり、勢いが衰えるなりするが、この亜人は馬鹿力で天井をものともせずに振り下ろす。
大剣で削れた天井からこぶし大の岩が降り注ぐ。

「うお！こんな狭いところで大剣（そんなもん）振り回すな！　生き埋めになるわ！」

「ヌウ。セッカク死合イヲ生キ埋メデ終ワラセルニハ勿体無イナ」

亜人は大剣を背中に背負い、拳を構えた。
格闘も出来るのか……
重そうな大剣を振り回す以上、拳でも相当の威力がありそうだ。

「くらえ！　『炎弾（ファイアブレット）』」

マーハの銃口から光と共に拳大の炎の塊が打ち出される。
その塊は、亜人を直撃する。
肉のこげる匂いが微かに臭う。

「どうだ！」
「コノ程度カ？」
「な！？」

直撃したはずの亜人には対して傷ついた様子はない。
少し胸の部分が焦げている様だが、それだけだ。致命傷には程遠い。

「おいおいおい！　樹ならぽっかり穴が開く威力だぞ！」
「フン。我ノ体ハソンナ軟デハナイワ！」
「もう一発！」

同じように炎弾を放つ。
今度の狙いは顔だ。多少なりともダメージが入るなら、顔を狙う。的は小さくなるが、目や鼻と言った感覚器官が集中している。小さい傷でもかなり効果があるはずだ。

「二度モ同ジ手ハ食ワヌ！」

亜人は何血迷ったのか、前進し炎弾に拳をぶつけた。その拳は炎弾を突き破り、俺に向かって飛んできた。

「ウソだろ！？」

急いで後ろに飛びのくが、予想外の行動とその結果に反応が遅れた。亜人の拳が胸に入った。

「ガハっ　ごほっ……」

後ろに飛んで威力を殺してなお、ドングよりもきつい一撃を受けた。軽く呼吸困難だ。幸い骨までは逝っていない。しばらく我慢すれば治る。
しかし、その間急激な動きは出来ない。動けば動くだけ苦しくなるからだ。
本当なら、その場から動かずに回復に努めたいところだが……

「ぼさっとしていると死ぬぞ！」

そんな時間をくれるはずもなく、体に鞭打って、距離を取り、２人で牽制する。

「『風弾（エアブレット）』」

――タンッ　タンッ　タンッ

風の弾丸を放ちながら、実弾も織り交ぜる。

風弾は着弾地点に小さい竜巻を巻き起こす。その竜巻はカッタートルネードほどではないが亜人の体に切り傷を刻む。

炎弾よりはダメージが入ってそうだ。たまたま、火に耐性がある種族だったのかもしれない。

実弾の方は……なんていうか、石をぶつけている気分だ。いくら撃っても、肌に弾かれるだけだ。

「頑丈すぎるだろ！」

あの亜人の肌は鉄板以上の硬度か！？

「ソノ程度ノ攻撃デ我ヲ傷ツケルナド無理ダ」

後退しながら常に距離を保つが、それも限界が来た。

洞窟の奥は行き止まりだった。これ以上後ろには下がれない。

「ククク、モウ下ガレンゾ！」

亜人には散々風弾を当てた。体中傷だらけだが、どれもかすり傷程度。

炎弾は聞かないし、土弾は実弾が効かない以上意味がない。水弾に至っては、基本的に回復用の弾丸だから逆効果。

万事休すか。他に攻撃方法なんて……あった。

けど、一か八かの賭けになるな。効かなきゃ終わりだな。
「少シハ出来ルカト思ッタガ、コノ程度カ……　死ネ」
「人間舐めんなあああああああ」
ネヴァンとマーハを亜人に向かって放り投げる。
亜人はひらりとどちらも避けて、その後ろで銃が地面に落ちる音がした。
「『武装錬金』」
手に鉄製のセスタスを練成して、亜人に殴りかかった。
「威勢ガイイナ。ソウデナクテハ狩リ甲斐ガナイ！」
亜人の腹に拳を叩き込むが、あまりの固さにセスタス越しでも拳が少ししびれる。
「イイ拳ダ！　ダガ効カヌ！」
反撃が飛んでくる。
だが、冷静に観察すれば本気のドングより遥に遅い。それに視線というか気配で狙っている場所が分かる。
すぐに体勢を整え、反撃をいなす。
「ヌ？」
「格闘は俺のが上みたいだな！　デカブツ」
再び腹に一撃を加える。

「フン、ヤルナ。ダガ、ソンア攻撃イクラクラオウトモビクトモセヌワ！」
「どうかな？　『錬金』」
武装錬金で作った鉄製のセスタスをさらに錬金する。
「グッ！？」
腹に当て拳を戻すとセスタスの先から鋭いトゲがいくつも生えていた。
そして亜人の腹から血が出ている。
これも致命傷には程遠いが、それでも今までの傷に比べれば大きい。
「ヤルナ。戦イトハコウデナクテハナ！　モット足掻ケ！　我ヲ楽シマセヨ！」
「誰がお前なんかに付き合うかよ！　やれ！」
亜人から距離を取りながら叫んだ。
――ビチャッ
水が掛かる音が亜人の後ろからした。
水を被った亜人が振り返ると、そこにはネヴァンを持ったマーハがいた。
「イツノ間ニ……　貴様ノ仲間カ？」
「そうだ」
「フン。獲物ガ増エタナ。マズハ貴様カラ狩ルト……」
「どうだ？　効いてきただろ」

亜人の動きがぎこちなくなり、地面に倒れこんだ。
なんとか起き上がろうとするが、手がわずかに動くだけで立ち上がれそうにない。

「貴様、何ヲシタ……」
「さあな」

倒れた亜人を放って出口に向かう。

「ネヴァン、マーハ。助かったよ」
「いえ、主様が気を引いてくれたおかげです」
「このくらいやらねばな。私の力では傷つけることも出来なかったのだ。このくらい当たり前じゃ」
「マーハ、毒はどのくらいもつ？」
「３０分ほどは持つかと。もっとも、亜人なのでもう少し短いかもしれませんが……」
「わかった。さっさと逃げよう」

ネヴァンとマーハを銃に戻し、腰に下げると振り向いて地面に倒れた亜人を見た。
神経毒が聞いている間に殺してしまいたいが、俺の力ではコイツを殺すことは出来ない。
殺す前に毒が解けても困るし、ココは逃げの一手だ。

「じゃあな。俺は逃げさせてもらう」
「戦イヲ放棄スルトハソレデモ戦士カ？」
「だれかれ構わず相手をする気はない。まして、相手が格上なら尚更な。まだ、死ぬ気はないんだよ！」
「毒デ動ケヌ我ヲ殺スコトスラ出来ヌ臆病者メ」
「ああ、臆病だよ。それがどうした？」

「何？」
「蛮勇を発揮して、殺されちゃ元も子もないからな。蛮勇と勇気の違いくらいは弁えてるよ」

カリーヌさんの修行でみっちり身についたからな。
感情に任せて蛮勇を発揮した日には、お仕置きと言う名のカッタートルネードが飛んでくる。
傷も、普段の３割増しだ。

「臆病ナ人族ヨ。イズレ決着ヲツケニ行クゾ」
「ふざけんな。そのときは、全力で逃げてやる」

なんせ、この亜人は本来の武器である大剣を使っていない。
もし、それを使って戦われたら、今以上に勝ち目がない。
改めて、対峙した時に勝てるほどの実力がついているならまだしも、今のままで再戦なんてゴメンだ。

「ダガ、断ル。我ガ名ハ『ブラムド』。気高キ武人ノ一族也、名乗レ人族ノ臆病者ヨ」
「答えると思うか？」
「答エヌノカ？」

なんで答えること前提に聞いてるんだよ！
あれか？
自分が名乗ったら、相手も名乗ると思ってるのか？
殺されかけた相手にホイホイ教えるわけないだろう。
名乗られたのに名乗らないのは礼儀知らず？
それで命が助かるなら、いくらでも無礼を働くぞ。俺は。

「追っかける手がかりなんて渡すか！」

「ソレナラバ無駄ダ。スデニ貴様ノ匂イハ覚エタ。何処逃ゲヨウトモ必ズ見ツケ出ス」
「なら全力で逃げるまでだ」
「クックックッ、面白イナ人族ノ臆病者ヨ。イイダロウ。7年待トウ。ソノ間ニ我カラ逃ゲ切レルダケノ力ヲ身ニ付ツケロ」
「7年たったら俺と戦いに来るつもりか？」
「ソウダ。今ノ貴様デハ物足リヌ。ダガ、我ヲ下シタノモ事実ダ。我ガ見タトコロ貴様ハマダ成長スル。スグニ狩ルニハ惜シイ」
「だから、相手なんかしないって言ってるだろ！」
「フハハハ、逃ゲル獲物ヲ追ウノモ狩リノ楽シミヨ」

ダメだコイツ。
本当に頭の中まで脳筋だ。金輪際係わり合いになりたくない類の手合いだ。
何も言わずに洞窟を立ち去る。

「7年後ヲ楽シニミシテイルゾ。名乗ラヌ人族ノ臆病者ヨ」

後ろから、ブラムドの声が聞こえてきたが無視する。
7年後か……　どうしよう。
対策を考えないと……

第17話『一難去ってまた一難の前触れ』（前書き）

えー定期更新と宣言したにもかかわらず、2週間も放置しました。
読者の方をお待たせして申し訳ありません。
今回はかなり筆のノリが悪く、拙い部分も多いと思いますがご容赦下さい。
今後は、クオリティー維持のために、不定期に変えようか悩んでいます。
筆のノリでかなり執筆速度が変わるので、ノリが悪いときは今回のような敵更新はきついです。
それでは、今週・先週・先々週と3連続投稿になります。

第17話『一難去ってまた一難の前触れ』

ブラムドと戦ってから、証拠を持って野営地に戻った時には時間ギリギリだった。
カリーヌさんは証拠を確認したあと、すぐにオークが居ると言う洞窟に向かった。
まぁ、もう居ないんだけどね。俺が焼く尽くしたから……
カリーヌさんに引きづられ、フラフラの体に鞭を打って洞窟までもう1往復した。
結局、俺が焼き尽くしたオークですべてだったらしく、カリーヌさんたちヴァリエールの兵士はオークを1匹も手に掛けることなく、ヴァリエール領に戻った。

「お疲れ様です。何者かの手によって先に討伐されていたようですが、あなたたちはそれぞれオークを倒したので、試験は合格とします。今日はゆっくり休みなさい」

カリーヌさんはそれだけ言って、兵士の方に行った。
俺とジャン兄は張り詰めた緊張が解け、その場に座り込んだ。

「あー疲れた」
「そうだな」
「ジャン兄はいいだろ？　楽にしとめられたんだから。俺なんてジャン兄に比べたら馬鹿みたいに大変だったんだぞ」
「しらん。運も実力の内だと、いつぞやお前が言っていたんだろう？」
「そりゃそうだけどさ。面倒ごとまで背負う羽目になったし……」
「面倒ごと？」

ブラムドにああ言ったはいいけど、実際問題どうしよう。
逃げるって言っても、匂いで追われるならどうしろって言うんだ。
水に入っても風に匂いが乗るし、四六時中風向きを気にしているなんて無理だしな。

「なぁ、ジャン兄。もしも、ジャン兄が誰かに追われるとしたらどうする？」
「いきなりだな。それがお前の言う面倒ごとか？」
「まあ、そんな感じ」
「そうだな。逃げるか戦うかしかないだろう。相手の強さにもよるが……」
「そうだな。じゃあ、仮にカリーヌさんに追われたとする」
「土下座して謝る」

即答かよ！　しかも土下座って……
ハルケギニアに土下座の風習ってあったっけ？

「謝って済む問題ならとっくにそうしてるよ」
「お前、カリーヌ様から逃げられると思ってるのか？」
「無理」
「だろう？　抵抗も無駄に終わりそうだしな」
「どうすりゃいいんだ……」
「なんだ？　まさか本当にカリーヌ様に追われているのか？」
「いや、違うけど……」

あまり詳しく話すわけにはいかないよな。
最悪巻き込みかねないし。
あれ？　それ以前にすでに家族巻き込んでないか？
匂いを辿るってことは、弔意滞在した場所に現れるわけで……
やばっ！　実家にもヴァリエール家にも居られないじゃん！

下手に長居すると、ブラムドが将来突撃してくるフラグが立つ。
うわー、もう放浪するしかないじゃん……

「どうした？」
「いやちょっと考え事を」

どうしよう。この歳で一人で生きるのは……知識的には何とかなりそうだけど、職が問題だな。
たかだか7歳の子供を雇ってくれるとは思えない。
大体、そこに滞在したり頻繁に通うとブラムドが突撃してくる。
人の居ない自然の中で自給自足生活するしか誰も巻き込まない方法がない。
まじでどうしよう……

第18話『一難去ってまた大きな一難』

1日休んでヴァリエール領を後にした。
起きている間は、これからどうするか必死に悩んだ。
長期滞在も頻繁な通いもアウト。
誰かを巻き込むことを前提とするなら、問題ないけどそれで誰かが死んだ日には目も当てられない。
もしかしたら、ブラムドが無関係な人間を巻き込むのを嫌うかもしれないけど、本当にそうするかどうかは怪しい。
かといって、一人で生きるのもほぼ無理。
主に金銭面で生活していけない。実家から援助して貰おうと思うと理由を話さなきゃならないし……
そうなったら、ドング辺りは返り討ちにしてやるとか言いそうだ。
俺のせいで家族を巻き込むわけにはいかない。
大体、信じてくれるかどうかも怪しいし。
亜人に襲われて、いずれ倒すっていう理由で見逃されたとか前例あるのか？

「坊ちゃま方、到着しました」

考え込んでいる間に実家に着いたようだ。
挨拶をするためにジャン兄と執務室に向かう。

———コンコン

ノックをして中に入ると、書類に挟まれた髭が座っていた。

「2人とともお帰り」
「「ただいま」」

「ふむ。数ヶ月の間に見違えるようになったな。これからお前達に大事な話がある」

なんだろう？　改まって、まさか面倒ごとの積み重ねじゃないよな？ただでさえブラムドの件で頭を悩ませてるっていうのに……

「お前達2人に1つずつ村を任せようと思う」

「はあ！？」

「もちろん、お前達だけで全てをやれとは言わない。家臣団もつけるつもりだ」

「いや、そうじゃなくて！」

アホか！？

何処の世界に7歳のガキに村を1つ任せてんだよ！

その村にどれだけの人間が居ると思ってるんだ？

「父上、何を考えているんですか？　俺たちはまだ7歳ですよ？」

「確かに領地経営を任せるにはまだ早いのは分かっている。だが、お前達。特にマルクの方には早い段階で経験して欲しいのだ」

「父上、なぜ私ではなくマルクなのですか？」

「ジャン。お前はワルド家の長男であり、次期当主だ。いずれ、我が家督を譲るつもりだ。だが、マルクには私から譲れるものはほとんどない」

まぁ、爵位なんてそんなもんだよな。

一子相伝。子供1人にしか受け継がれない。次男はせいぜい長男の予備。三男以下は絶望的。

「ジャンが家を継いだ際に、マルクはどうなる？　無駄な争いを避けるために言っておくが、当主はジャン。お前だ。例えお前が死の

うとも他のものに爵位を譲る気はない」

コレは、俺の反乱対策だろう。
俺がジャン兄を殺せば、通常なら爵位はそっくり俺に転がり込む。
が、こう言われれば、ジャン兄を殺しても俺に爵位が回ってくることはない。
まぁ、そんな気はサラサラないけどな。

「父上、マルクがそんなことをすると思っているんですか！？」
「ありえぬとは言えぬ。それが貴族社会での当たり前だ」
「そんな……」
「かといって、マルクを放り出すのも忍びない。可能であれば、自身で功績を上げ貴族になってほしいが、生憎トリスティンは伝統を重んじる国だ。そう易々と貴族にはなれまい。ならば、ジャンの家臣として仕えてもらいたいと考えておる。幸い、マルクに才能はありそうだしな」

まぁ、書庫の本を読破したからな。
その中には、魔法関係以外にも領地経営やら帝王学の本もあったし。
あんまり興味がなかったから、魔法以外は流し読みだけど……

「おめでとうジャン兄」
「っ！　マルク。お前はそれでいいのか！？　たかが数日早く生まれただけで優劣を決めるなんて！」
「構わないよ。そもそも貴族に興味はないし」
「どういうことだ？」
「そもそもさ。貴族って何よ？」
「なに？」
「魔法が使えるから貴族？　爵位を持っているから貴族？　俺に言わせそんなもん名ばかりもいいところだ」

それに気付いてない貴族がトリステインには多すぎる。
そいつら寄生虫は徐々に国という大樹を根元から腐らせ、いずれ大樹そのものをだめにするだろう。

「ほう……。ではマルク。お前の考える本当の貴族とは何だ？」
「貴族とは、民の上に立ち民を導き、また民を守る者かな」
「魔法が使える者じゃないのか？」

ジャン兄が口を挟む。
その考え方なら、次代でワルド家も終わりかもしれないな。
自滅するか国と共に滅びるか。そのくらいの違いしかないだろう。

「魔法なんて、貴族の血が混じってれば使えるでしょ。魔法使いが貴族なら世界は平民メイジは皆貴族になるな」
「だが、彼らには爵位がない」

今度は髭が口を挟む。
髭は分かってて聞いてるな。
興味深そうに俺の顔を見ているが、その表情には若干の同意が見られる。

「爵位ねぇ。そんなもんいらないだろ」
「いらない！？　国から賜る名誉ある称号だぞ！」
「名誉ね。そりゃ、賜った本人なら功績に応じた名誉かもしれないけどさ、その子供だからっていう理由で継承した方はどうなんだ？　ジャン兄は子爵を賜ったご先祖様と同じくらい功績を挙げられるの？」
「……」
「まぁ、今すぐ挙げろって言うのは無理だけど、死ぬまでに生涯を

掛けて挙げるのは努力次第でできるかもしれないけど、爵位を継いだ時点では、そんな功績ないでしょ？　死ぬまでに見合った功績を挙げられる保証もないし。父上も胸を張って子爵に相応しいだけの功績を挙げたといえますか？」

「到底言えぬな」

「でしょう？　父上でさえ言えないのに、それ以下の歳で爵位を継ぐジャン兄がそう簡単に挙げられるわけないだろ」

「では、先ほど言ったお前の中の貴族はどうなんだ？」

「貴族って言うよりは、統治者だね。王は貴族を従え、貴族は家臣と民を従える。上の者が下の者を管理する。その立場を表すのが爵位で、やることは王も貴族も変わらない。下の者が上の者を生かし、上の者が下の者を守る」

「貴族社会ではありえぬ考え方だな。貴族が民に生かされるなど……」

「では、民無くして貴族は生きていけますか？　貴族が畑を耕しますか？　貴族が召使のように働いてお金を得ますか？」

「なら、なぜ平民は貴族に税金を払う？　自分たちだけで生きていけるなら、貴族に税金を払う必要はないじゃないか」

「自分達だけで生きていければね。平民が盗賊や亜人相手に戦えると思いますか？　戦争が始まったら敵兵と戦えると思いますか？　答えは無理です。貴族は税金を受け取る代わりに、民が安心して暮らせる場所を守る謂わば護衛なんですよ。」

「ふはははは。貴族を護衛と言うか！」

髭は大笑いしている。

第１９話『貴族とは何たるか』

髭の笑いが収まるのを待って話を再開した。

「俺の中の貴族って言うのは、城の兵士と同じですよ。金を貰って安全を提供する存在です」

「やはり、お前には才能がある。ジャンに継がせる言うのは早まったかもしれんな」

「ち、父上！？」

「辞めてください。今更後継者を俺に変えるとか言わないで下さいよ？　さっきも言いましたけど、貴族なんて名前に興味はありません。それに一度決めたことをそう簡単に変えると、誰も言葉を信じなくなりますよ？」

言葉だけの人間なんて前世で散々見てきたからな。

いや、目は見えなかったけどさ。

「なあ、マルク。それ見方を変えると、名ばかりの称号を私に押し付けてるだけじゃないか？」

「やだなジャン兄。何も名ばかりなんて言ってないよ？　その名前に見合った功績を挙げれば、名は実になるよ。ようは今後の努力次第」

そんな努力をする前に、俺は生き延びる努力をしなきゃいけないんだ。

無駄な努力なんてしてる暇ないっての！

「ならば、その功績を挙げるためにも領地経営をしてもらわねばな」

「謹んでお断りします」

「私も今のままでは力不足です」
「初めから功績を挙げることなど期待してはいない。ただ、机上だけでは学べぬモノもある。お前達にはそれを学んでもらいたい。何より、先のマルクのようにまだ貴族社会の常識に染まりきっていないお前達なら、私が思いつかないような統治をするかもしれん。成功すればそれでよし、ダメでも元の生活に戻るだけだ」

アレだけ言ったのにまだやらせる気か。
まぁ、ジャン兄が味方になっただけでも進展した方か。

「しかし、父上。それでは民の生活はどうなります？　先ほどマルクが言ったように民が我らの生活を支えているのであれば、民に不安を及ぼすのは私たちの足元を不安定にするようなものですよ？」
「そうならないようにするのが統治だ。今ならまだ私が居る。何かあっても助けに入ることが出来る。だが成長してからではそうはいかんだろう。遅ければ遅いほど失敗は大きく見える。そんなことも出来ないのかと周りが笑うだろう。だが、早いうちに成功すればそれは大きな功績となる」
「確かにその通りだけど、それだと成功することが前提に聞こえるけど？」
「ああ、家臣団は助言を行うと同時に監視でもある。もしも、村を滅ぼすような案を出せば、即刻領主を解任する」

箱庭の中で監視つきの経営か。
髭は他の貴族に比べれば、まともな方だけど、それでもトリスティンの貴族に変わりはないか……

「拒否権は？」
「拒否しても構わんが、マルクお前の場合は将来が不安になるぞ？
いくら家族といえど穀潰しを家に置いて置く気はない。自分で職

を見つけるか望まぬ結婚をさせられる覚悟はあるんだろうな？」
元々、家を継ぐ気はなかったし、自分で職探しもするつもりだったからそのくらいの覚悟はあったけど、最後の政略結婚はまずい。好きでもない相手を一緒になるなんてゴメンだ。
そのくりあなら一生一人身で過ごした方が気楽だ。貴族の令嬢なんてごく一部を除いて馬鹿ばっかだろうし。

「はぁ、わかりました。やればいいんでしょうやれば」
「ジャン。お前はどうする？」
「私も受けます。胸を張って子爵を名乗れるようになるために！」
「いい返事だ。家臣は誰を連れて行っても構わんが、本人の意思を尊重するように」
「「はい！」」
「では、今日は休みなさい。出発は一週間後だ。それまでに統治する村の情報を教える」

髭との話を終わらせて、執務室を出た。

「マルク。少しいいか？」
「何？」
「領地経営のことで少し話がしたい。私の部屋に来てもらえるか？」
「いいよ」

余り参考にはならなかったけど、ブラムドの件で話を聞いてもらったし、このくらいはお安い御用だ。
ジャンの部屋に入り、『サイレント』を掛けた。
誰かに聞かれたくない話なのか？

「マルク。お前は領地経営はどうするつもりだ？」

「どうとは？」

言葉が足りない。

領地経営の何をどうするというのか？

運営の方法か、それとも家臣団の誰を連れて行くかということか？

「まだ、どんな領地を任されるのか分からないが、どうやって経営するのかだ」

「いくつか考えはあるけど、父上の監視役が許可を出すかどうか」

「参考までに教えてくれないか？」

「んー、ダメ」

「なぜだ？」

「経営方法は自分で考えなきゃね。大体、さっきの貴族の話でも分かったと思うけど、俺とジャン兄じゃ貴族の考え方が違うんだよ。俺にとって貴族の称号なんてただの飾りでしかないけど、ジャン兄にとっては誇りある称号でしょ？　俺は貴族と民を同等に扱っても何とも思わない。でも、ジャン兄は違う。価値観が違うのに俺の意見を言ったってしょうがないだろ？」

「それじはそうだが……」

「じゃあ1つだけ教えてあげる。俺は、平民を家臣として登用するつもりだ。それも重要な役職に」

「なんだと！？」

「魔法が使えようと使えまいと関係ない。魔法も含めて能力で決める。例え貴族の子息であっても、無能なら捨てる。民で魔法が使えなくても有能ならば拾う。身分の壁のない完全実力主義の家臣団を作る。ジャン兄はそれを自分のところ出できる？」

「……」

「出来ないでしょ？　これだけ価値観が違うんだから、いくら案を教えても無駄だよ」

「なら、俺はどうすればいい！？　お前の案が合理的なのは分かる。

だが、貴族としてのプライドが、意地がそれを許さない俺は……」
「甘ったれるな！」
「っ！？」
「どうすればいいかなんて自分で考えろ。自分で自分に折り合いをつけろ！」
「私は……」
「ジャン兄」

俺は立ち上がり、俯くジャン兄に声を掛けた。

「ジャン兄はさ、尊敬の念もないのに敬われて嬉しい？」
「嬉しいわけないだろう」
「世の中の貴族の大半はそれだよ。民が魔法という力を恐れ、何をされても逆らわない。逆の立場ならそんなこと我慢できる？　王族に無理難題を言われ、王権という力で有無を言わせず従わされる」
「嫌だ」
「貴族と王族の関係なんてそんなもんだよ。下は上に頭があらない。それは貴族と平民でも一緒。貴族はまだ下に暴政として吐き出せるからまだいいけど、民は何処に吐き出せば言い？　行き場のない怒りはどうなる？」
「いずれ、暴発する」
「その矛先は貴族に向いているよ。　王族も対象に入ってるだろうけど、貴族のさらに上に一段飛ばし矛を向けるほど民も馬鹿じゃない」
「いずれ、民の不満が爆発するというのか？」
「それは貴族の行いのせいだよ。なら貴族の行い次第でそれを抑えることだって出来る。貴族がどうとか考える前に、民がどう思っているのか考えるべきだと思うよ」
「民の思い……」
「それとさ、さっき畏敬の念なしに敬われても嬉しくないって言っ

たよね。それなら、畏敬の念を持って呼ばれる行いをすればいい。民に畏敬の念を持って呼ばれてこそ本当の貴族でだろ？　名ばかりの貴族で満足しているようじゃ。器が知れるぞ？」

「……なあ、マルク」

「なに？」

「俺なりに貴族としての領地経営を考える。出発前にその相談に乗ってもらえるか？　お前の意見が聞きたい。俺はお前と違って、貴族と平民を同列に見ることは出来ない。だが、民から名ばかりの貴族でなく本当の貴族として、名前を呼ばれたい」

「ああ、いつでも相談に乗るよ」

「ありがとう」

そして、俺はジャン兄の部屋を後にした。

さてと、領地経営をやるとなると、人選考えないとな。

だれを連れていくか……

第２０話『忘れてた』

ぐあああああ！　ジャン兄の話やら領地経営の話やらで、完全にブラムドのことを忘れてた！
いくら領地をよくしても俺のせいで襲撃されたら意味ないじゃん！
こうなったら、さっさと領地経営を終わらせて逃げるしかないな。
あと３日で領地に向かわないといけない。
俺が任された領地は特に目立った所のない領地で名前はパウベル村と言うらしい。
そりゃいきなり、重要な場所に行かせたりしないか。
情報を持ってきた髭以外からも情報を集めた。私兵団の中に何人か村出身者が居たおかげで、より詳しい話を聞くことが出来た。
貧しくも慎ましやかに暮らす田舎と言った感じらしい。
山沿いで交易路からは外れているため、外との交流は少なく、次男三男などの後を継げない者は出稼ぎに出ているらしい。村出身者もその類だった。
自分の部屋に篭って、どう経営するか考えていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「開いてます」

振り返らずに声だけ掛ける。
来客は、ドアを開けて部屋に入ってきた。

「マルク。お前は領地経営をする気があるのか？」

来客である髭は若干怒りを含んだ声で言った。

「どうしたんです父上？　そんなに怒って」

「ジャンは自分が連れて行く家臣を家臣団の中から選んでいるが、お前が誰かを選んだと言う話は一切入ってきていない。どういうつもりだ？」

ああ、そのことね。

「吟味している最中です。明日には話を持っていくつもりですけど」
「家臣たちも準備と言うものがある。いきなり言われても困るだろう。なぜもっと早く決めない」
「今からならジャン兄に迷惑が掛かることもないでしょう？」
「……先にジャンに家臣を選ばせたのか？」
「はい。どうしても必要な人材以外はそこまで拘りませんから」
「そんなことで領地経営などやっていけるのか？」
「初めてのことだから出来ると確約はできないけど、それなりに自信はあるよ」
「それなら構わないが、なぜジャンに先に家臣を選ばせた？」

やれやれ、俺が父上の思惑に気付かないとでも思ったか。
髭は後継者の話の時に、ジャンが死んでも後継者は変えないと言った。
しかし、髭自身が後継者を変えてはいけないとは言っていない。
髭にとっての貴族が何かは知らないが、もしもジャン兄が領地経営で失敗すれば後継者を変える可能性もある。
俺としては、後継者なんてゴメンだし、爵位なんて言う重荷と国に繋がれる首輪を貰う気はない。
ジャン兄には、彼が考える経営をやってもらわなくてはいけない。
経営方法の良し悪しは置いといて、それが人材不足で実行できなきゃ話にならない。
それに、俺の連れて行く家臣団はそれほど多くなくていい。
だから、人材をジャン兄に譲った。

コレはジャン兄にも話してある。もちろん、絶対に連れて行かれたくない人材についてもあらかじめ交渉済みだ。

「今回の評価によっては、後継者が変わるかもしれないでしょ？」
「……ふむ。やはり、私は見極めを誤ったかもしれんな」
「さあ、どうだろう？　もしかしたら、俺が領地経営で大失敗するかもしれないよ？」
「ならば、よく監視せねばな」

さて、そう簡単にいくかな？

第２１話『早々に離脱』

派遣されるまで後２日

「ドング。準備の方はどう？」

「おう。俺の方の準備はバッチリだ。部隊から錬金が得意な奴を２～３人引っ張ってきたし、各系統の指導官を１人ずつ勧誘したけど、本当にこんな面子でいいのか？」

「十分だよ。後は村出身の一般兵も連れて行くから、馬車の用意も頼める？　指導官は結構歳食ってるから、歩くのは大変でしょ」

「そりゃ構わねぇが、こんなに少なくて大丈夫なのか？　向こうは２０人近く集めてるぞ？」

「そんなにいらないよ。小さな田舎村の経営だよ？　そんなに人材が居ても手に余るだけだよ。それに、監視は減らしておきたいしね」

「なにかバレちゃまずいことでも企んでんのか？」

「まさか。別にバレても問題はないよ。ただ、バレると反対されるだけ」

「そういうのをバレちゃ不味いっていうんじゃねぇのかよ」

「悪事じゃないし、経営には必要なことだから」

「まぁ、俺にゃあ学がねぇからどうこう言えた話じゃないが、何か悪事を企んでるなら即座に報告するからな」

「領地を良くしに行くのに悪事を働いてどうするのさ！」

まぁ、悪巧みはしてるけどね！

その後、ドングには向こうで何をするの開きかれたが、向こうに着いてからのお楽しみだと言ってはぐらかし続けた。

―――派遣当日
屋敷の前には荷物と人員を乗せた馬車が３０台も止まっている。
もっとも、その大半はジャン兄の馬車だ。俺の馬車は１０台しかない。

「それでは、それぞれ向こうの領地を頼むぞ」
「「はい」」

特に話すこともなく、それぞれの馬車に乗り込んで目的地へ向かう。
馬車の御者は村出身の一般兵に任せて、俺は指導官とドング、錬金隊は馬車の中で話をしている。

「この調子で行けば、夕方には村に着く予定らしい。なので作業自体は明日から始める。それでいい？」
「ああ問題ねぇ」
「「了解です」」
「しかし、ぼっちゃん。まだ何をするかも聞いてないっすけど……」
「若様、ワシのような老いぼれをわざわざ引っ張り出して何をするおつもりですかな？」
「余り変なことをさせるようなら、約束どおり当主に報告するザマス！」

上から順番に
『火系統の指導官』ルベル・フラマムさん。指導何の中で最も若い青年で、戦場の空気が苦手と言う変わり者。指導力や技術は一級だけど、人を傷つけるのを嫌っているため、あまり兵士向けでない。
『風系統の指導官』ウェントゥース・アルブースさん。白髪が特徴的な初老の老人だ。彼は歴戦の勇士で、先代当主に仕えていたらし

いが、年齢を理由に退き、指導官をやっていた。
『水系統の指導官』イムベル・ルキラさん。ザマス口調が特徴的な四十路近くのおば……とても四十路前には見えない素敵なお姉さん（彼氏募集中）。指導員の他に治療部署の古株。
あとは、カチコチに緊張している土系統部隊から引っ張ってきたソリドゥムとリクィドゥム兄弟（男）、キニス（女）が話を聞いている。
この5人には、村に着いてから魔法で色々やって貰う予定だ。
「まず、今日は向こうに着いたらゆっくり休んで本格的に動くのは明日から。ココまではいい？」
全員が頷き先を促す。
「で、明日からだけど俺、しばらく留守にするから！」
「「「「「はあ！？」」」」」
全員から驚きの声が聞こえた後は口々に文句が飛んでくる。
そりゃ、仕事丸投げするんだから、そうなるよね。
「本当に領地経営する気あるザマス？」
イムベルさんが呆れた顔をして問いかけてきた。
あるに決まっている。なければ、わざわざ関わりの薄い村に出かけたりしない。
「もちろん。そのためにも俺の留守は必要なんだ」
「理由を教えてもらえんことには納得できんぞ？」
「そうだな。自分だけ楽しようなんざ甘いことを考えてるなら、分かるな？」

イムベルさん、ウェントゥースさんをはじめ、全員の目が据わっている。
この説得に失敗したら、俺は領地に着く前に連れ戻されるかもしれないな。

「俺は途中で分かれて王都に行こうと思う」
「王都に？　どうしてっすか？」
「王都の浮浪者や浮浪児を村に連れてくるつもりだ。あと可能なら平民メイジも」
「なんじゃと！？　正気か？」
「正気も正気だよ」

俺は驚いている5人に分かりやすく情報を説明した。
俺が派遣されるパウベル村だが、土地の割りに人口が少ないが、開拓できる土地も含めれば、かなりの広さの土地がある。
しかし、機材の関係で開拓が進まず、次男三男は開拓せずに出稼ぎに行き、人口は減少する一方。
さらに村の中でしか血が交わらないために血が偏りやすい。
その対策に、王都から浮浪者や浮浪児を連れてきて外の血を入れるのだ。
浮浪児と村の子供には、一般的な教育を施す。
最低でも読み・書き・計算は出来るようにして、今後の村を支える重要な人材になってもらいたい。
これは俺たちはいつまでここにいられるか分からないからだ。
せっかく発展させても、居なくなった後も維持できるだけの人材をおいて置かないといけない。
変わりに派遣された代官がそれをするのは不可能だろう。だから村のことをよく知る村人に維持を任せるのだ。

人材はコレで確保して、次は開拓だ。
開拓が進まないのは、開拓用の機材や農業に使う農具が不足しているからだ。
田舎の村ならどれも貴重品で貸し出す余裕などないだろう。
それなら、作ってしまえばいい。開拓用の機材や農具はすべて錬金で作る。
そうすれば、大してコストも掛からずに生産できる。

次はメイジ側の補充だ。
連れてきた家臣団も俺と共に帰らねばならない時が来るだろう。
俺たちが帰った後もこの村で生活してくれるメイジが必要だ。だが、普通のメイジではまず田舎には住まないだろう。
そこで、平民メイジだ。彼らに平民の生活を向上させるために働いてもらう。
平民メイジたちは一般の平民にとって厄介者でしかないが、それは犯罪に走るためだ。
それならしっかりとした監視の下で、指導すればいい。権力を求めるなら、家臣団にでも組み込めばいい。
村で家庭を持てば、住んでくれるだろう。いずれは、彼らにこの村の代官を任せられればいいと思う。

以上の計画を実行するために、王都に向かうと説明したら、全員からダメだしを食らった。
さすがに、いきなり平民メイジを引っ張ってこようとは思っていないけど、浮浪者や浮浪児はいいと思うんだけどな……
中にはメイジの素質をもつ者も居るだろうし。

「若、開拓を舐めておりますぞ。土地を広げるのがどれだけ大変なことなのかお分かりですか？　育てる食物の種はどうします？」
「ああ、それならコレを使う」

説明用に持ってきた種を出す。
こぶし大の大きさで、丸く黄土色に近い実だ。所々から芽が出ている。

「ちょ！？　これ、『悪魔の植物』じゃないっすか！？　こんなもん食べるとか正気っすか！」

今日はよく正気を疑われる日だな。

「食べるよ。これはれっきとした野菜だから」
「若、この植物には毒があることはご存知ですか？」
「知ってるよ」
「知ってる上で食うのかよ！　どんだけ頑丈な体してんだ？」
「毒があるのは、発芽した芽と緑に変色した部分だけだよ。それさえ取れば食べられる」
「しかしのう……」
「さすがに、『悪魔の植物』を食うのは……」
「まぁ、コレは種用だから食べないけどね」

そう言って、『悪魔の植物』ことジャガイモを懐にしまった。

「とりあえず、開拓した場所にはコレを植える」
「でも、人を増やすなら食べ物も増やさないとダメザマスヨ？」
「ああ、それもさっきのでまかなえる。収穫が出来るまでは定期的に実家から援助してもらうつもりだけど、ジャガイモの第1作が出来れば賄えると思う」
「ジャガイモ？」
「さっき『悪魔の植物』って言ったアレだよ。ジャガイモは麦の3倍くらい取れるから、ちょっぽど無茶をしない限り足りなくなるこ

とはないよ。保存もかなりの間できるし」
「麦の3倍ですと！？　それはすごい……」
まぁ、連作障害とかその他諸々の問題もあるけど、対処法はあるし大丈夫だ。
実家の支援も、エキューよりも食料現物で頼んだため、かなりの量を支援してもらえることになっている。
「しかし、ジャガイモが『悪魔の植物』として恐れられてるなら好都合だ」
「どういうことっすか？」
「ジャガイモには色々使い道があるから。ただ食べるだけでなく保存食にも向いているし、お酒にも出来る。その上、周りが『悪魔の植物』と敬遠するなら生産は独占できる。名物にすれば人を集める材料になる」
「そこまで考えておられたとは……」
いや、名物云々は今思いついただけだけどね！
原材料を聞かれたら、初めの内は秘匿して、評判が上がったところで公開すれば敬遠されることもないだろう。
片栗粉も作れるから、揚げ物も作ることが出来る。名産品が盛りだくさんだな。
「それで軌道に乗れたら、大々的に移民の募集をする。そういつまでも勧誘に走れるわけじゃないからな」
「でも、他国のスパイとかどうするんすか？」
「こんな何もない田舎にわざわざスパイしに来るわけないだろ」
「た、確かにそうッスね」
というか、トリステイン自体にスパイを送る必要性がない。

腐敗貴族に空の王位。そのくせ、自尊心だけは人一倍高いときた。
もう潰そうと思えば、何処でも潰せるだろう。
ヴァリエール家が反乱の声を上げれば、あっさり王位が取れるだろうと読んでいる。
生憎、沈み行く船に残る気はない。
最悪、国を潰されてもある程度の待遇を認められるほどの有用性を確保しないといけない。
じぶんの身の安全に加え、領民の面倒まで見ないといけないとは……
これから苦労しそうだ。将来、ハゲになりたくないな……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6671t/

元盲目少年が行くゼロ魔の世界（仮）

2011年10月2日00時20分発行